

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Nivkh Seal Hunting and Ritual

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大塚, 和義 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004194

ニヴフのアザラン猟と送り儀礼

大 塚 和 義*

Nivkh Seal Hunting and Ritual

Kazuyoshi OHTSUKA

Though undergoing a rapid socio-economic change since the beginning of this century, the Nivkh people (Gilyak) of today, who live in the northern half of Sakhalin Island and at the mouth of the Amour River on the continent, still maintain to a large extent their traditional way of life, in which fishing and seal-hunting are of paramount importance.

Based on research conducted intermittently during 1990 to 1993 at Luplova (Romanovka), a small Nivkh village on the northwestern coast of Sakhalin, the author describes (1) modern and traditional seal-hunting methods, (2) the utilization of the game (the process of dismembering, meat consumption, fur preparation, oil extraction, etc.), and (3) the ritual of sending back the seal spirit to the sea world.

The ethnographical material presented here proves that the Nivkh cultural complex related to seal-hunting has a strong consistency (cf. Kreinovich 1934, 1973), and shows a close resemblance to those of the Uilta and the Ainu (cf. Chiri and Yamamoto 1979, etc.).

The author suggests that this resemblance comes from a common cultural tradition whose origin can be traced back to the Okhotsk Culture, once diffused widely in the area from 8th to 12th centuries. Archaeological evidence examined verifies the author's hypothesis.

- | | |
|-------------------|-------------------|
| 1. ニヴフの生活におけるアザラン | 3. アザラン送り儀礼 |
| 2. アザランの狩猟とその利用 | 4. 送り儀礼についての若干の考察 |

* 国立民族学博物館第5研究部

Key Words : Nivkh, Sakhalin Island, seal-hunting, ritual, Okhotsk Culture
キーワード : ニヴフ, サハリン島, アザラン猟, 儀礼, オホーツク文化

1. ニヴフの生活におけるアザラシ

ニヴフ（ギリヤーク）は、サハリン島北半部の東西両海岸地帯と内陸部のトゥイミ川流域、それにアムール川河口地帯においてふるくから先住し、サケ・マスや海獣の捕獲を生活の基礎にした漁撈採集民である¹⁾。ニヴフの民族的な起源については解明されていない。しかし、この地域における最古の歴史をもつ居住者とみることに異論がない。言語学的にはその近縁な系統関係を周辺諸民族に求めることのできない孤立した様相を示すとされ、それゆえ、パレオ・アジアート諸語族のひとつに位置づけられている。ニヴフの伝統的な居住地域は、歴史的に若干の拡大と縮小を繰り返したことは確かではあるが、およそ図1に示した地域を基盤に活動し、現在にいたっているとみてよいであろう。

ニヴフの集落は、漁撈活動に適した海岸部に沿って形成され、自然に発達した潟や砂洲の地帯に集中していた。20世紀に入っても伝統的な土地との関係を維持していたニヴフ社会は、ソヴィエト体制の成立と生産組織の集団化の強制によってこの関係がそこなわれ、激しい変貌をよぎなくされた。しかし、近年の体制崩壊と少数民族の自立をめざす運動の高揚により、かつての母なる大地に戻って自営の漁撈生産を主体にした自立的生活の確立をめざす動きが目立っている。祖先が歴史を刻んだ大地への強い執着は、同族の親しい者たちが寄り集まってゆかりの土地に帰るといふ、一種の帰郷運動さえも引き起こしている。

たとえば、サハリンにおいても生存条件の過酷な自然環境にある北西部沿岸の辺地にさえ、明確な民族意識をもって都市の生活を捨て、この地に移住した家族によって営まれる「民族村」が建設されつつある。ここでは、ニヴフ民族の主體的権利獲得と文化再生を目標に掲げて、実験的な性格をもつ漁撈を基盤とした生活が試みられている。民族自立運動と連動した自己のアイデンティティを土地との関わりで積極的に確認する作業は、都市に住む仲間からも注目され、支援も少なくない。しかし、この民族村の将来は後述の部分で触れるように決して楽観できない難題を抱えている【大塚

1) ニヴフ語において「人間」を意味する単語は、単数形ではニヴフ、複数形ではニヴフグッである。したがって本稿では、民族の自称であるニヴフで統一した。なおロシア語ではニヴヒと表記されている。この民族に対する呼称は多様で、とくに中国では歴史的に呼称の変化がみられる。また日本では間宮林蔵などが用いたスメルンクルとして知られたが、これはサハリンアイヌが彼らと呼ばれならわしたものである。英語では近年までギリヤークと呼ばれた。現在、ニヴフの人口はサハリンにおいて2275（1989年調査）人であり、アムール地域においてもほぼ同数が居住しているといわれる。

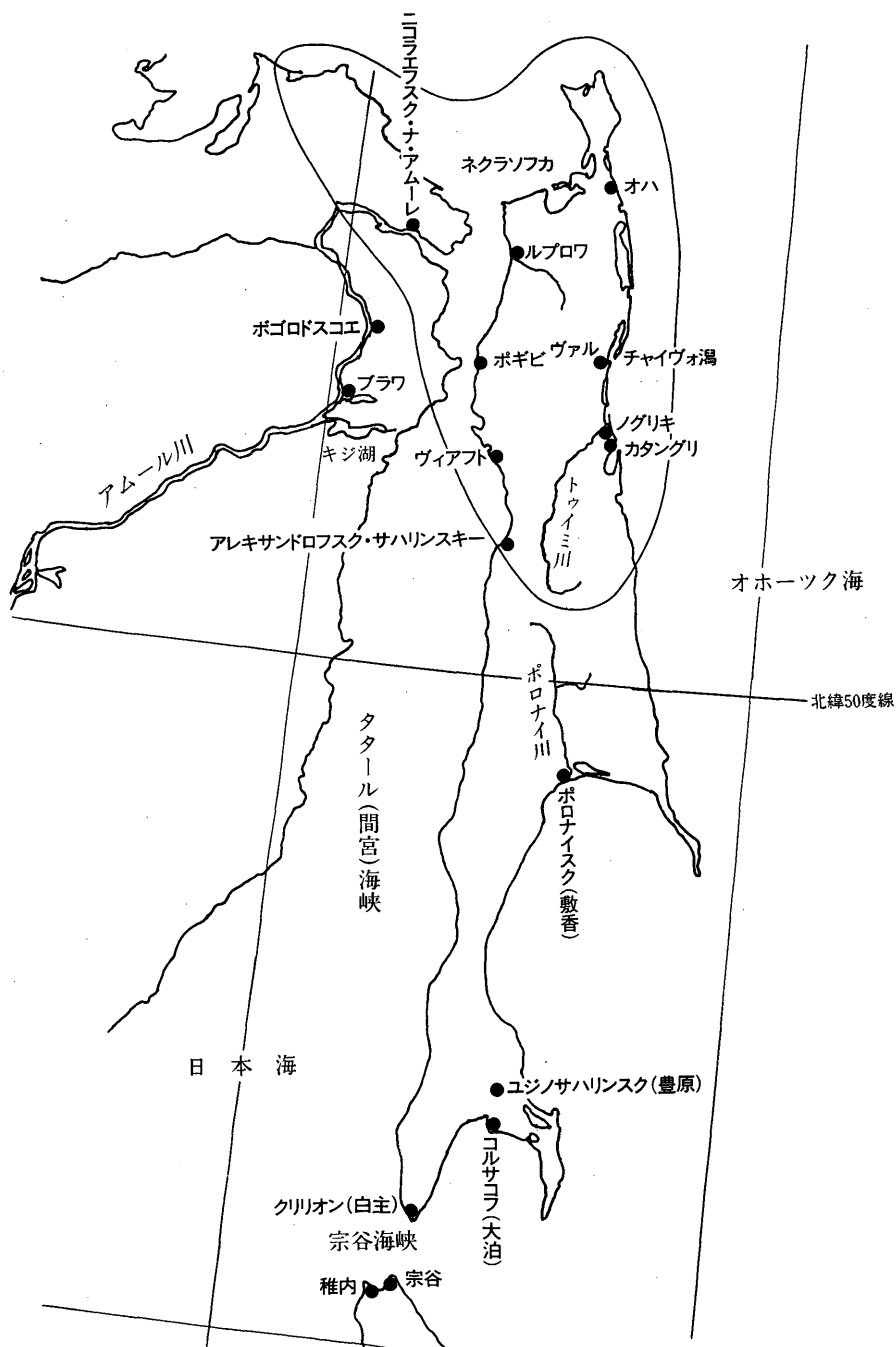


図1 ニヴフの居住範囲 (1994年 大塚作図)。

1991]。ソヴィエト国家のコルホーズやソフホーズが解体され、小規模で私的な生産単位への転換が進むサハリン北部の沿岸の漁村のたたずまいは、あえて民族村を標榜するものでなくても、生産や流通のさまざまな問題を抱えて活力にとぼしく、その集落の景観はセピア色の古写真で知る20世紀初頭前後のニヴフ集落をおもわせるものがある。

伝統的なニヴフの集落規模は、2～3軒から4～5軒が通常の規模であるといつてよく、河口部を中心に形成された。19世紀初頭になると、当時「北蝦夷地」と呼ばれたサハリン島にロシアの接近や外国船の来航などをみる事態となり、これに脅威を感じた幕府はサハリン北部にまで情報収集のための探索を実施した。これに従事したいわゆる日本の探検家たちはニヴフの集落にも足を踏み入れて、戸数や人口についても不十分ながら記述している。たとえば、1808（文化5）年にサハリンの西海岸の大部分を踏査した松田伝十郎の『からふと嶋奥地見分仕候趣奉申上候書付』[松田 1988（1808）]には、ニヴフの住居がワンライ2軒、ウイワット2軒、ノテト3軒と記されているように、多くは2～3軒の集落構成であった。1857（安政4）年の成石修らもニヴフの居住地域の南限である西海岸のポロコタンの状況を「家三四軒あれど、二軒前²⁾にて家内分れ居るよしなり」[成石 1978（1857）：121]と記している。

河川によってサケ・マスの遡上に粗密があり、とうぜんのことながらその密度の高いところには、漁民ばかりでなく、これを餌にするアザラシなどの海獣が寄り集まり、ニヴフの人たちが「大きな村」とよぶ10軒前後の規模の集落が形成された。このような大きな村はまた、地形的にも恵まれており、漁の適地だけでなく交通・交易の要衝でもあった。一般的にいつて、河口地点はニヴフにとって生産活動の主体となる場所であった。河口部周辺は入江や潟など地形的に舟の係留に適したところが多く、舟による交通の要地として、遠隔地から交易品を積み込んで訪れる舟の泊地でもあったのである。

ニヴフの社会は氏族単位に構成され、さらにこれらを連合して統括した集団組織が存在したことは文献記録によって確かであるが、その組織の実態はほとんど解明されていない。しかし、最近の言語学的な調査により、サハリン北部のニヴフはふたつの方言集団に大きく区分できることが判明している³⁾。すなわち、島の北西海岸一帯からシュミット岬の西側を中心とするアムール方言地域と、東海岸北部を中心とするサ

2) 二軒前は、二家族分のこと。

3) 村崎恭子を研究代表者とする文部省科学研究費補助金（国際学術研究）『サハリンにおける少数民族の言語に関する調査研究——サハリンアイヌ語、ウイльта語、ニヴフ語——』[村崎 1993]の成果などがあげられる。

ハリン方言地域である。この方言差はニヴフ社会の歴史的動向を反映しているとみてよく、ことにアムール方言のサハリン島における予想以上の広がり、大陸のアムール川河口部との通婚や交易などをとおした密接な関係を物語るものである。

ニヴフ社会は、ロシア革命以後には大きく生産組織も変わり経済生活も変容したが、辺地において伝統的な漁撈に従事する者が多く、特色ある民族文化とその技術を比較的よく保持することができた。伝統的なニヴフ社会において主食的位置を占めるサケ・マスなどの漁撈が生産活動の中心となるが、海獣猟もさかんに行われ、わけてもアザラン猟はニヴフの生活にかかせない素材を得る手段として重要な役割をはたしてきた。アザラン油は最高の食用油として好まれ、肉もなじみの味覚として身近な存在である。

現在においても、アザランを主とする海獣皮はニヴフの日常生活に欠かせない存在である。しかしそれだけではなく、少数民族による民芸品の製作やロシア国内の消費用として、さらに輸出用としても毛皮の需要は大きい。そのために資源保護をはかりながらの捕獲がつづけられているが、サハリン各地での聞き取りでは、近年クラカケアザラン *Histriophoca fasciata* など、種類によっては生息頭数の減少がみられるという。

サハリンにおけるニヴフは4種類のアザランを捕獲してきた。しかし、筆者が実際に現地で同定できたものはゴマフアザラン *Phoca vitulina* とワモンアザラン *Pusa hispida* の2種類である。ことに前者のゴマフアザランは、ニヴフの居住地域にもっとも多く生息しており、とうぜん大量に捕獲し利用する対象となっている。稀に捕獲できるクラカケアザランは、特有の大柄の斑紋を生かして衣服に加工された。

おしなべて、捕獲したアザラン類からは生活に欠かせない良質の食用油が採れ、丈夫な皮質は紐、手袋、帽子、靴などの皮製品の素材として主要な役割をはたしてきた。ちなみにアザラン皮の紐は、鉋を射込んだ獲物をたぐりよせるときの漁具類やイヌ橈の牽引につかわれていることから、その強靱な材質が理解できるであろう。シャマンが憑依状態に入るときに連打する太鼓の皮もアザランを多く用いている（写真1）。

ゴマフアザランとワモンアザランは、サハリン島をすっぽり包むオホーツク海に生息分布をみる。前者は北はベーリング海、南は九州までの日本列島の沿海に生息し、後者はカムチャッカ半島から北海道北部、沿海州沿いの日本海に分布をみる【西脇1965】。ことにニヴフの生活領域内の海や潟や河口付近には生息に適する環境条件がそなわっているとみえて、多数のアザランが年間をつうじて容易に捕獲できる。したがって、夏季と冬季で異なるアザランの生態行動に対応できる捕獲技術が生み出され、



写真1 ニヴフのシャマン衣装。

スカート、靴、太鼓はいずれもアザラシ皮である（ルブロワのゾーヤ・アグニョン）。

銚をはじめとする捕獲用具にもさまざまな創意工夫がくわえられてきた。

本稿は、サハリンのニヴフの生活におけるアザラシの役割と、その猟法や解体および油や肉の利用、さらにアザラシの霊送り儀礼についての具体的な事例報告と若干の考察を目的としたものである。

以下、筆者自身がサハリン島北半部における1990年7月から1993年12月までの期間に実施した6回にわたる調査から得たデータをもとに述べたい【大塚 1991, 1994】。データは主として西海岸北端に近いルブロワで実施した調査によるものである。

現在のルブロワは、帝政ロシア時代にはロマノフカと呼ばれた⁴⁾。それ以前のニヴフが自立的活力をもっていた時代は、ニヴフ語で「ナニヴォ」と呼ばれた。すなわち

4) 当時ナニヴォと呼ばれたニヴフだけの住む村に、20世紀初めにロシア正教の伝道者が来て、ロシア皇帝の名前にちなんでこの地をロマノフカと呼ぶように提案し、当局から公式に認められた。革命後ルブロワと改称され、現在にいたっている。しかしニヴフの古老たちは、先祖がナニヴォと呼んできたことの記憶を筆者は1990年に聞き取りによって確認できた。

1808（文化5）年に間宮林蔵がサハリン西海岸を苦心のすえに北上し、同行のアイヌにそれ以上の前進を拒否されて、やむなく引き返したという林蔵の到達した最北端の地、「ナニラー」は、まさにこの地であった。この事情はかれの著作である『東韃地方紀行』（間宮 1988（1811））に記述されている⁵⁾。これはニヴフ語で、「ナニの村」である。「ナニ」とは、生き物を指す単語であることは間違いない。ニヴフの人も具体的になにを示しているのか分からないが、おそらく鳥のことであろうという。「ヴォ」は村を意味する。

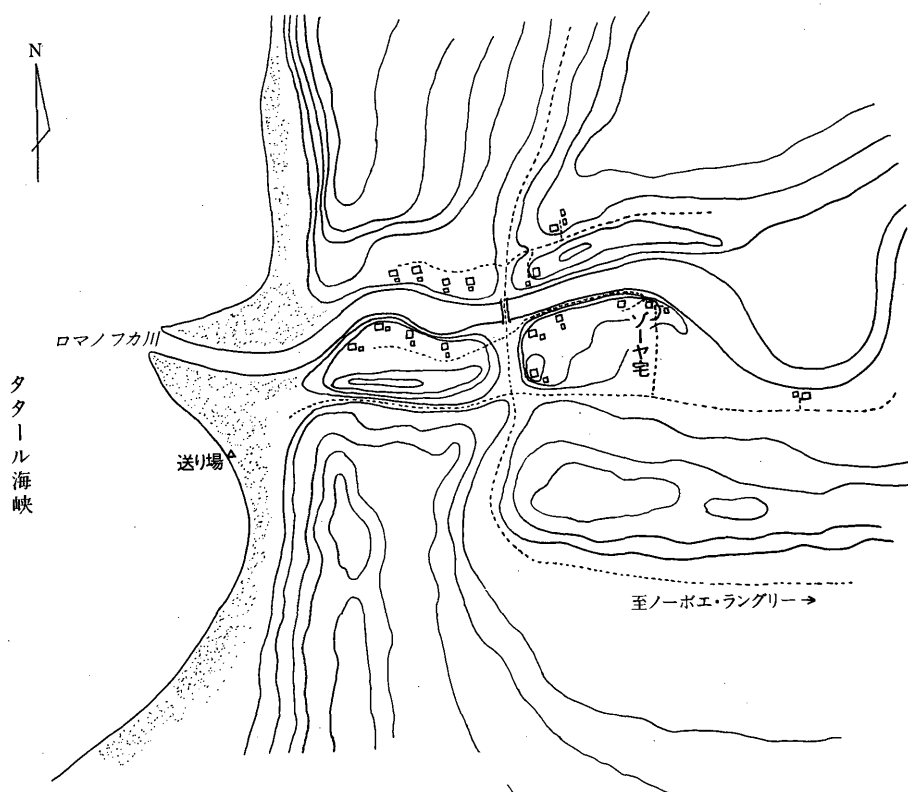


図2 ルプロウの集落（概念図）大塚作図。

5) 「（文化8年5月）十日、イタクマーに至りしに、従夷又行事を恐るゝに依て、やむ事を得ず地夷一人をやとふて先道となし、同十二日、此处を発し、其日ナニラーに至りつきぬ。此处此島極北の地にして、夷家僅に五、六屋ある処なり。ノテトより此处に至るの間、島と東韃地の相對せる迫処にして、潮水悉く南に流れ、其間潮路ありといへども波涛激沸の愁も少く、小軟の夷船といへども進退さまで難き事なし。此处よりして北地は北海漸々にひらけ、潮水悉く北に注ぎ、波涛大に激起すれば船をやる事かなわず。さらば山を越へて東岸に出んといへば、従夷また従ひがゑんぜず。やむ事を得ずして、同十七日、船をかへし、同十九日、ノテトに帰り至りぬ」[間宮 1988（1811）: 121-122]。

1992年現在、ルプロワの集落は、年間をつうじて定住しているニヴフが9家族で13軒の家屋がある（図2）。これにロシア人の所有する小屋であるダーチャが数軒ある。ここには以前に大きな漁業コルホーズが設置されていたために人口が多く、学校や病院までもあった。最盛期の1964年には、1000人以上が居住していた。漁業コルホーズが廃された1966年以後、急速に衰退したとのことである。ルプロワにおけるアザラシについての主要なインフォーマントであるゾーヤ・アグニユンは、後述するように大陸のアムール河口で生まれ、結婚によってサハリンに来島し、島内のニヴフ居住地をいくつか移動した後、1982年にルプロワに無住となっていた家屋を入手して定住した。ゾーヤの技術伝承は、基本的にニヴフのアムール方言地域のものとみてよいであろう。

2. アザラシの狩猟とその利用

2-1. 狩猟

アザラシの捕獲には、さまざまな方法が生み出されてきたが、捕獲具から銚と鉄砲の2種類に大別できる。

現在のニヴフにおけるアザラシの捕獲はすべて鉄砲によるもので、頭部の眼球直上周辺をねらい撃ちして、一瞬のもとに斃す。猟銃を用いれば、物音にきわめて敏感なアザラシを有効射程距離の50～60 mから100 mもの遠方から容易に狙撃することができる。伝統的な銚による接近猟法より技術も労力もいらないうえに、近年では鉄砲のみが使われている。およそ75歳以上の古老たちが経験した銚猟には、熟練した銚の操作と、息を殺して根気よく獲物を斃せる距離に接近できるまで待つ忍耐強さが求められる。この猟法は、鉄砲という簡便な利器のまえには存在しにくいために消滅した。ただし、水面を泳いでいるアザラシは鉄砲で撃つことができない。なぜならば、斃されたアザラシはすぐに水中に没してしまっで見失うからである。夏季にはアザラシが砂浜に横たわっていたり、岩礁や流木に這い上がっていることが多いので、射撃で捕獲しやすい（写真2）。

筆者が捕獲に同行して実際に目にすることができたサハリン島の夏季におけるアザラシ猟は、基本的にはほぼ様式は一定している。まず、猟船については、専門のものではなく、通常は漁船として使われているボートを利用する。船体は金属板を溶接した長さ4 m、幅1.6 m前後のもので、エンジンは船外機が多い。100頭以上で構成される群れの大部分が浜に上がって休息しているところを、鉄砲で連打して斃すことが能率的

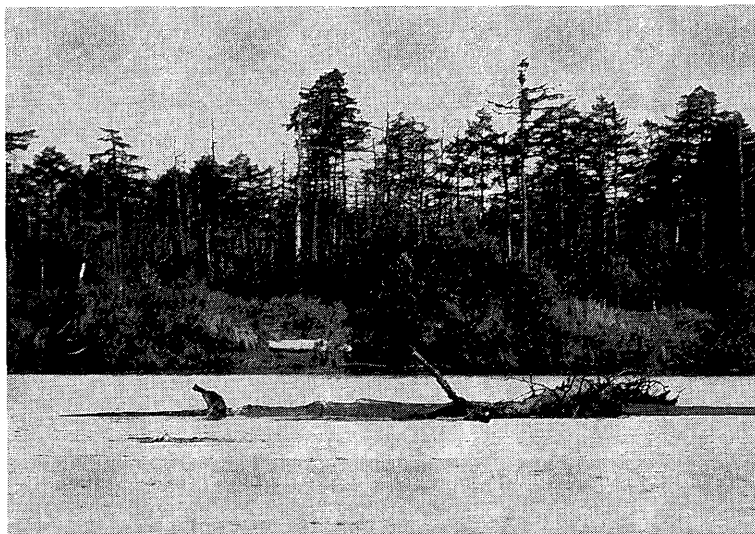


写真2 流木の上で休むアザラシを撃ち損じたところ（ポロナイ川河口 1993.9）。



写真3 波の静かな潟の砂洲に群れるアザラシ（サハリン東岸・ビルトン 1990.8）。

であるが、このような機会にめぐり合うことは少なく、そのうえ群れへの接近自体が難しい（写真3）。目標に近づくと船のエンジン音などの騒音で、アザラシの群れはいったん水中に没して逃げる。しかし、アザラシは息継ぎのためにならず水面に顔を出さねばならない。そこでエンジンを止め、声や音を立てないで5～10分ていど待

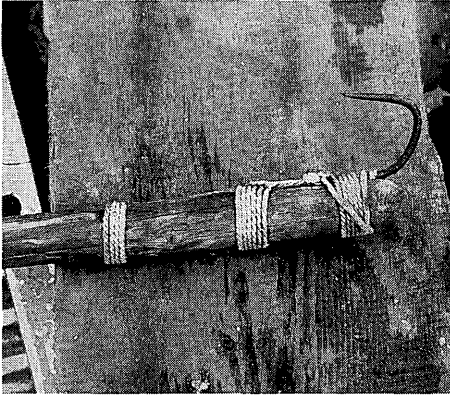


写真4 鉄砲で撃ち斃したアザラシをひっかけて船に引き上げる鉤。

つ。警戒心を解いたアザラシが流木に這い上がって体を休めたところを狙い撃つ。

この鉄砲猟の欠点は、斃された獲物がすぐさま水中に消えてしまうことにあり、命中と同時に急いでエンジンをかけて、鉤のついた棒でアザラシをひっかけ、ボートに引き上げなければならない。このタイミングが重要で、射手とボートの操舵者のふたりの呼吸が合わない、獲物が回収できずに没してしまうことがある。

鉤は、5 mmほどの太さの鉄線を釣り針状に曲げて、先端を鋭利に尖らせたもので、長さ2~3 mの棒の一端に装着してある（写真4）。鉤でボートに引き上げられた獲物が、まだ生きている場合は、仕留め棒で頭部を叩いて殺害する。

この仕留め棒は、現在は木を削っただけのもので、先端より手もとの握り部がいくらか細くなった長さ70~80 cmのものである。しかし、かつての伝統的鉆猟のさかん

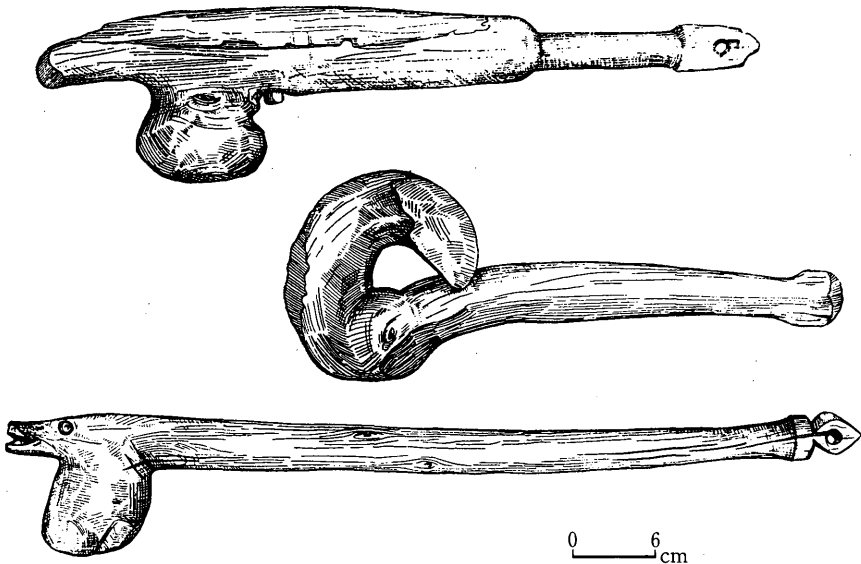


図3 ニヴフの仕留め棒 [ТАКСАМИ 1975]。

な時代は、手斧状をした形態の一木造りの仕留め棒が使われ、この先端部分にはアザランや魚などのモチーフが丸彫されていた。銚を射こんで手もとにたぐり寄せたアザランをこの棒で一撃した(図3)。彫刻されたモチーフによって霊を送る儀礼対象の獣を特定できる。これとおなじ機能をもつ仕留め棒は、ウイлта(オロッコ)にも存在している。これは霊送りの儀礼に際しても儀礼用具のひとつとして用いられていた⁶⁾。

現在、オットセイ、ラッコなどの国際保護獣よりも厳しくはないが、アザラン類も密猟や乱獲をふせぐために、ロシア政府の法的規則により捕獲数量の一定の規制と狩猟者の制限が行われている。そのため、伝統的にアザランを行ってきた「北方民族」と呼ばれている先住・少数民族および学術研究のためなどの特別な許可証を有する者しか猟はできない。違反行為をふせぐために自然保護監視員が猟場を巡回して眼を光らせている。しかし問題は、結果的に捕獲数の規制枠が守られたとしても、上述の鉄砲猟のもつ欠点によって、殺害されても回収されず、毛皮、肉、油を有効に活用できないままになったアザランがかなりの数にのぼると推定されることである。

先住民族が行ってきた銚による伝統猟法は、手投げによって獲物を射止められる距離内に接近する熟練した捕獲技術が必要とする。しかし、銚猟は、致命傷を与えたアザランを確実に手もとに引き寄せることのできるものであり、無益な殺害がふせげる点はあらためて評価したい。

伝統的猟法によれば、水面もしくは水面近くに泳ぐアザランを、舟から狙って銚を打ち込めばよいのである。したがって夏季の場合には、手漕ぎの舟でアザランに接近し、その体部に銚を打ち込むことができる。捕獲対象に接近さえできれば、銚猟は鉄砲にひけを取らないほど、きわめて有効な猟具である。この銚は、20世紀前後から普及したもので、猟師自身が鍛えてつくった鉄製のものである。図4⁷⁾に示した形式の銚先「チャメラ」と呼ばれ、その原形は古い時代の骨角製のものに求められる。

また、アザランは好奇心がつよく、しずかに丸木舟を海に漂わせていると、人間の方に近寄ってくるものさえいるという。この習性を利用して、鉄製のすどく研ぎすました銚先を装着した中柄に、浮きの役目をする舟状の木製板、つまり浮き板をとりつけたものを使うことがある。

6) またアイヌやアメリカ北西海岸の先住民などのサケ漁撈を主とする文化には、捕獲したサケの頭を叩いて仕留める棒が普遍的にみられる。

7) この銚は長くアザラン猟にたずさわってきたルブロフ居住のヴァシリイ・ボギユン(1908年生まれ)の用いてきた形態で、図示した資料は鍛冶の技術を継承した彼の息子、アレクセイ(1956年生まれ)の鍛えたものである。

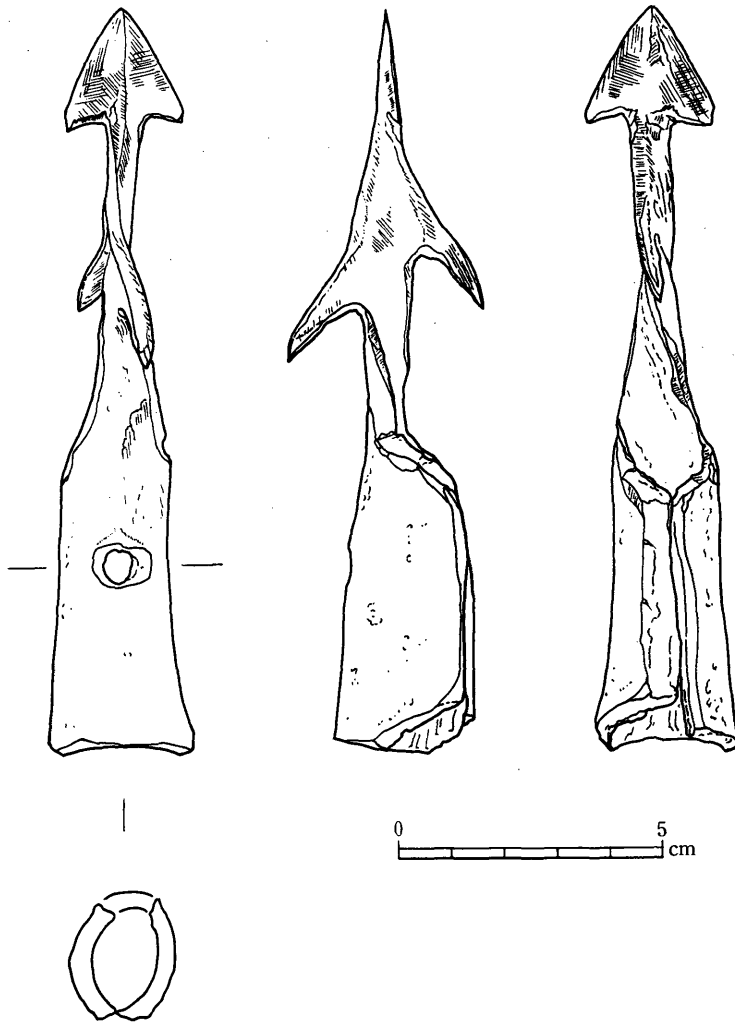


図4 海獣捕獲用の鉄製鉾。

浮き板のついた鉾は、夏季には浮力で水面を滑るように獲物まで注意ぶかく接近して、突き獲るものである。この浮き板付きの鉾は水面が凍りついた冬季にも使われる。氷の割れめからはい上がって、氷上の平坦部で体を休めているアザラシにねらいを定めて、感づかれないようにできるだけ接近し、木製の浮き板を滑走させて、一気に鉾先を体部に射込んで捕捉するものである。このとき狩猟者は、白っぽい毛皮や布切れを用いて氷のなかにとけこむカモフラージュ法もとったという。また、鉾を体部に射込まれたアザラシは暴れることが通常であるので、先述した特別な彫刻のついた

仕留め棒で撲殺する。

すでに述べたように、近年のアザラシ猟は鉄砲が主体であるが、ルプロワ周辺では刺し網も併用されて捕獲が行われている。

1993年12月現在、アザラシ猟がさかんに行われている地域は、島の中部東岸のアニワ湾をふくむポロナISK地区、北部東岸のノグリキ地区、最北部のオハ地区、および西海岸のアレキサンドロフスク地区である。このうち北緯50度線以南に位置するポロナISK地区は、1905年～1945年までの40年間にわたって日本領有となり、鉄砲猟がかなりの規模で行われた。ポロナISK（敷香）市街に近いポロナイ川の中洲にアイヌをのぞく北方系の民族を強制的に集めた居留地「オタスの杜」のウイルタ、ニヴフなどの先住民族の一部も、アザラシ猟に従事したことは確かである。

ちなみに、筆者が入手した1942年の敷香駅取り扱いの発送伝票（図5）から、関西方面あてに「アザラシ汐皮」⁸⁾と記された塩漬け皮が、7月1日に1162 kg、7月3日に664 kg送り出されたことが分かる。短期間に総計1800 kg以上の汐皮が出荷されたことになる。捕獲から汐皮までに加工するかなり大規模な生産と流通の組織が存在したと、当時ポロナISKで毛皮を集荷していた人⁹⁾から筆者が聞いたことを裏づける資料である。

「汐皮」にされたアザラシの種類や大きさは不明であるが、ゴマフアザラシの生皮1枚約10 kgと仮定すれば、180頭を超える量であることは驚きである。しかもこの数量は筆者が入手確認できた2枚の伝票から分かる数だけであり、当時の捕獲総量の一部でしかなかったであろう。戦時体制のもとで毛皮の需要が増大したにもかかわらず、当時重要な生産地であった中国からの輸入が困難になり、原皮資源の不足を補うために、それまで利用範囲が限られていたアザラシ皮にも活用の眼が向けられたとみてよいようである。

この伝票にみられる時期のアザラシ皮の生産や集荷は、数量のうえでは日本人によ

8) 小川魔天氏のご教示によれば、「汐皮」の作り方は、樽に漬物を漬ける要領に似ている。まず毛皮の裏の脂肪を掻き取る。この作業を専門用語では「ハゼン」という。このハゼン処理の後、その面に塩を擦り込む。この皮を、毛の面を下にしてかまぼこ型の台の上に何枚も重ねてのせるとその重みで皮に含まれた水分が徐々に脱ける。この工程を2～3回繰り返した皮は1～2年間以上は保存が可能となる。塩で処理をした皮を「シオナマカワ」といい、完全に乾燥させたものは「エンカン（塩干）」という。エンカンにした皮は現在でもアメリカやアフリカから盛んに輸入している。

9) 当時、敷香で田中治三郎氏は馬具店を経営するかたわら、この付近一帯の猟師から毛皮を買い取っていた。オタスの杜に住むニヴフやウイルタのほとんどは、獲った毛皮を「バンサン」の名で知られていた彼のもとに持ち込んだという。田中 了氏のご教示によれば、田中治三郎氏は敗戦とともに稚内に引き揚げており、オタスの杜出身のウイルタ、日本名北川平吉氏は1953年にソ連の抑留を終えて日本に移住した際に、まさきに稚内の田中氏を訪ねて世話になり、アザラシ猟で生計を得て自活したということである。

<table border="1"> <tr> <td>荷種別</td> <td>扱</td> </tr> <tr> <td>支拂方法</td> <td>元 拂</td> </tr> </table>	荷種別	扱	支拂方法	元 拂	(運送品受託票)		<table border="1"> <tr> <td>受付昭和</td> <td>年</td> <td>月</td> <td>日</td> <td>號</td> </tr> <tr> <td>發送昭和</td> <td>57</td> <td>7</td> <td>7</td> <td>號</td> </tr> </table>	受付昭和	年	月	日	號	發送昭和	57	7	7	號																																																				
荷種別	扱																																																																				
支拂方法	元 拂																																																																				
受付昭和	年	月	日	號																																																																	
發送昭和	57	7	7	號																																																																	
<table border="1"> <tr> <td>荷受</td> <td>人</td> <td>荷送人</td> <td>本</td> </tr> <tr> <td colspan="2">人兵衛新飾石</td> <td colspan="2">人</td> </tr> </table>	荷受	人	荷送人	本	人兵衛新飾石		人		<table border="1"> <tr> <td>運送品</td> <td>アザラシ皮</td> </tr> <tr> <td>(品名・数量・荷姿)</td> <td>14個</td> </tr> </table>	運送品	アザラシ皮	(品名・数量・荷姿)	14個	<table border="1"> <tr> <td>着</td> <td>山陽本線</td> </tr> <tr> <td>扱</td> <td>市着驛</td> </tr> <tr> <td>店</td> <td>店</td> </tr> <tr> <td>發</td> <td>綿太東海興業</td> </tr> <tr> <td>扱</td> <td>敷香驛</td> </tr> <tr> <td>店</td> <td>般香介州運送株式會社</td> </tr> <tr> <td></td> <td>棉太敷香町西2路北1丁目2番地</td> </tr> <tr> <td></td> <td>電話代表341番764番</td> </tr> <tr> <td></td> <td>設務口座小總2130番</td> </tr> </table>	着	山陽本線	扱	市着驛	店	店	發	綿太東海興業	扱	敷香驛	店	般香介州運送株式會社		棉太敷香町西2路北1丁目2番地		電話代表341番764番		設務口座小總2130番	<table border="1"> <tr> <td>着店</td> <td>月</td> <td>日</td> </tr> <tr> <td>受付</td> <td>第</td> <td>號</td> </tr> <tr> <td>取立金</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>荷立金</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>運賃</td> <td>9945</td> <td></td> </tr> <tr> <td>積込料</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>扱料</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>集荷料</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>収立金回収料</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>引換料</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>合計</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>差引</td> <td>9945</td> <td></td> </tr> </table>	着店	月	日	受付	第	號	取立金			荷立金			運賃	9945		積込料			扱料			集荷料			収立金回収料			引換料			合計			差引	9945	
荷受	人	荷送人	本																																																																		
人兵衛新飾石		人																																																																			
運送品	アザラシ皮																																																																				
(品名・数量・荷姿)	14個																																																																				
着	山陽本線																																																																				
扱	市着驛																																																																				
店	店																																																																				
發	綿太東海興業																																																																				
扱	敷香驛																																																																				
店	般香介州運送株式會社																																																																				
	棉太敷香町西2路北1丁目2番地																																																																				
	電話代表341番764番																																																																				
	設務口座小總2130番																																																																				
着店	月	日																																																																			
受付	第	號																																																																			
取立金																																																																					
荷立金																																																																					
運賃	9945																																																																				
積込料																																																																					
扱料																																																																					
集荷料																																																																					
収立金回収料																																																																					
引換料																																																																					
合計																																																																					
差引	9945																																																																				
<table border="1"> <tr> <td>送代金</td> <td>引換</td> <td>格</td> <td>代</td> </tr> <tr> <td>要</td> <td>否</td> <td>否</td> <td>否</td> </tr> </table>	送代金	引換	格	代	要	否	否	否	<table border="1"> <tr> <td>記</td> <td>事</td> </tr> <tr> <td>収入済</td> <td></td> </tr> </table>			記	事	収入済																																																							
送代金	引換	格	代																																																																		
要	否	否	否																																																																		
記	事																																																																				
収入済																																																																					

図5 アザラシ皮の發送伝票。

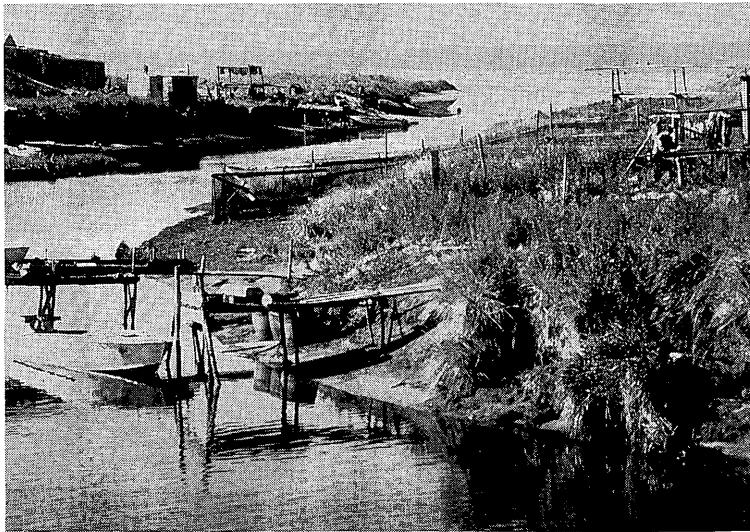


写真5 ロマノフカ川に沿ったルブロワの集落。魚干し台が散見できる (1992.8)。

るものが大半を占めていたとみて誤りが無い。しかし、オタスの杜の先住民たちもその一翼を担っていたことは確かである。彼らはその熟達した射撃の腕前と地理的な知識をかわれて、対ソ戦の諜報活動のために日本軍によって徴用されたことはよく知ら

れている。

サハリンの先住民は、伝統的に交易のための毛皮生産を海獣には鮪、陸獣には毘や仕掛け弓を用いて行ってきた [大塚 1992a]。このような伝統のうえに、近代において鉄砲が持ち込まれて熟達した結果、きわめて効率の高い毛皮生産が可能になった。彼らの熟達した狩猟技術の助けを借りて、戦時状況下のアザラン猟を展開していたことの一端を証明するものとして、この伝票は重要である。

2-2. 解体と肉の処理

ここでは、サハリン北西岸のルプロワ（写真5）におけるアザランの解体処理を中心に述べたい。

アザラン解体の手順に地域差はほとんど認められない。図6に示したように、解体の最初はアザランを仰向けにして、前鰭と尾鰭の付け根部分の毛皮表面に小刀で切れ目を入れ、直下の脂肪層表面を露出させる。これは全体を一枚の大きな毛皮に剥ぐ際に、鰭の部分が障害にならないようにするためである。ついで、頭部の付け根に切れ目を一周させる。目から鼻にかけての部分の毛皮はそのまま残される。そのあと、頭部から尾鰭に向かって、腹部の中心線に一筋の切れ目を浅く入れる。この切れ目を手掛かりに腹部に深く小刀を入れて脂肪層の直下と肉の間を分離していくのである。腹部を一直線に深く切り裂くときの小刀は、刃先を上向きにして使う。図6の①から③までの切り込みによって、一枚皮として利用できる毛皮の縁にはすべて刃物が入られ、後は剥ぎ取るだけである。毛皮と本体とを手際よく剥離していくには、剥ぎ取った部分の毛皮を片手でひっぱりながら、白い脂肪層と赤い肉との間層を小刀一丁で切り離

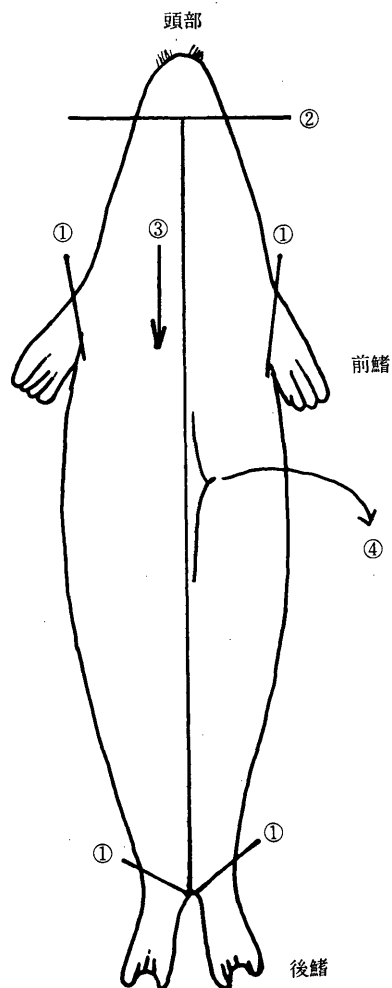


図6 アザラン解体（腹面）の順序（番号順）。

す。厚い脂肪層を切り開くために小刀は油ですぐに切れなくなるので、頻繁に砥石で刃を研いで作業を続けていく。いくらか毛皮の剝離が進んだところで、すべての鰭部分を付け根から切り取る。前鰭と尾鰭は左右にあるので都合4つの部分に切り離された鰭は、一か所にまとめて取り置かれる。鰭は後述するようにたいへん美味で珍重されている。

ルプロワにおいて1993年9月に筆者が観察した解体処理の場合、ゴマファザランがおよそ体長1.5 m、体重150 kgを超える大形のものだったので、3人がかりで作業をしていた。また、1992年8月にカタングリヤノグリキでみたゴマファザランは、体長80~90 cm、体重40 kg前後であり、この場合は、ひとりで皮剥ぎと解体作業を行っていた。

前者の解体処理は、河畔の漁船を係留する板敷きの小さな栈橋の上で行われた。作業に従事した人は、75歳の女性ゾーヤ・アグニョンをリーダーに、52歳の次男ゲーナジー、それに37歳の三男ヴァーシャである（写真6）。解体は女性が中心になって行う慣習で、男性に限られる猟と対応関係にある。解体のときに、霊が宿るとされる重要な頭部の処理は、猟師の妻か母親がするものと決まっていた。しかし筆者が観察したところでは、長老のゾーヤはこの伝統的規範¹⁰⁾を可能な限り守ろうとするが、息子たちはそのことにあまり関心をはらわなかったといってよい。

解体は母子3人がかりで手際よく左右両側から皮剥ぎを行い、最後に背中の部分の剝離によって、毛皮についたままの白い脂肪層の部分と肉とに完全に分離された（写真7）。この皮剥ぎに要した時間は、およそ20分ほどである。つぎに純白で7~8 cmもの厚さがある脂肪層を、およそ30~40 cm四方に小刀で毛皮から切り取る。この板状方形の大きな脂肪片の中央付近に約10 cmの長さの切れ目を入れておく。この切れ目の用途はかならずしもあるわけではなく、そのような作法で行う習わしであるとのことである。つぎつぎと毛皮から剥ぎ取られる脂肪の板状片は、長さ1.2 m、幅50 cmの楕円形のブリキ製容器に投げ入れられる。すっかり脂肪層を除去された毛皮は、川から汲んできた水できれいに両面を洗われて、折りたたまれて取り置かれる。このあとの作業は、赤褐色の肉の大きな塊と頭部だけになる。ここまでで全所要時間は50分ほどである。

頭部の処理はゾーヤが主に行ったが、最終局面の胴体からの切断は力を要するため

10) ゾーヤによれば捕獲されて村に持ち帰られたアザランの頭部の処理は霊送り儀礼まですべて女性の受け持ちであるという。つまり、脳の摘出とそれに続くボイル、頭骨の化粧などの一連の処理や、頭骨を海に戻す儀礼を含む一切の行為者は女性である。



写真6 桟橋で解体がはじまる。



写真7 胴から剥ぎ取られた脂肪つきの毛皮。



写真8 切り離されたアザラシの頭部。

に、仕留めたゲーナジーがていねいに切り離した(写真8)。頭部の処理は伝統的には、もっぱら女の手で行う習わしであることは、クレイノヴィチも記述している【クレイノヴィチ 1993 (1973): 120】。

胴体だけになった部分は、腹部を切開し、内臓を取り出す。心臓、肝臓などは食用にするが、長くひきだされた数10 mにおよぶ腸はイヌの餌にされる。胃袋は、裏返しにされて内容物を捨てて水洗いされ、油入れに加工される。腹腔内に溜った血液は、掻き出して川に捨ててしまい、飲むことはしない(写真9)。

肉の部分はおよそ30 cm四方ぐらいの塊に切り分けられる。肉のなかでていねいに取り出される部位は、背骨の直下両脇にあるヒレ肉である。これは鮮度がよければ生食にもされるからである。ヒレの部分を含めて比較的良質の肉塊を取った後、まだかなり肉のついたままの背骨や肋骨は、大ざっぱに長さ30 cmでいどに切断されて、魚の容器に納められる。すべての肉の処理と容器への収納が終わるまでには、開始から1時間20分ほど要していた。このあと、棧橋の板の上についた血などの汚れを、川の水をかけてきれいに洗い落とした。長時間、中腰の姿勢をとった状態の作業なので腰が痛くなると、3人は語っていた。

解体が済むと夕食の支度である。ゾーヤは、疲れもみせずアザラシといっしょに獲ってきたサケを細みの刃物を使って調理する。チョウザメの叩きや焼き物、魚入りのスープなど五品ほどの料理をまたたくまに仕上げた。ニヴフの男たちは薪割りや水汲みなどの力仕事を受け持つが、調理には基本的にたずさわらない。しかし、アザラシの鰭は、男の手で屋外において調理されることが一般的のようである。

鰭は珍重されている。鰭は火でじっくりあぶり、表面の毛を焼き焦がした上を小刀でていねいにそぎ落とす。火がよく通ったところで、細かく刻んで食べる。鰭骨は食べられないが、軟骨部分はこりこりとした歯ざわりで美味である(写真10)。

ゾーヤ一家にアザラシのどの部位を好むか聞いてみたところ、それぞれ好みのラン



写真9 脂肪層を毛皮から剥いで切り分ける。



写真10 焼き上がったアザラシの鰭（細かく刻んで食べる）。

クは異なった。たとえばゾーヤは脳、舌、耳、の順にうまいという。舌はボイルして食べるが他は「タラァ」すなわち「生で食べられるもの」である。他の者たちは、一番うまいのは焼いた鰭であると異口同音に答えた。

2-3. 毛皮処理

剥ぎ取ったアザラシの皮は、バケツなどの容器に入れて水漬けにしておく。2～3日ねかせて置いたあと、水から取り出し乾燥させる。皮を張るためには、アザラシの大きさに応じた方形もしくは長方形の木枠をつかう。皮本体の縁から2 cmほど内側に、20 cmでいどの間隔で紐をとおす孔を開け、頭部の付け根部分の皮からはじめて、紐孔にとおした紐を強くひっぱって皮をできるだけ均等に大きく平らに張りながら木枠に取りつけていく。紐張りが木枠を一周したら、アザラシの前鰭を除去した際にできたふたつの穴を紐で縫い閉じる。穴の周囲の皮縁に沿って、小刀の先で数か所孔を開け、この孔に一本の紐をとおし、最後に絞って綴じ結ぶ。この処置がすむと、さらに縁の紐孔をふやしながら、乾燥した皮が平均した厚さになり、全体がおなじような強度でひっぱられているように調整する。張りつけ作業中にも、皮に付着している脂肪や肉片を小刀で削り取る。皮張りや鞣しなど皮の加工処理はすべて女性の仕事である(写真11)。

木枠に張りおわった皮は風通しのよいところに置く。天候の状態にもよるが、夏季ならば、ふつう4～5日で乾燥する。乾燥しおわったら、手揉みをしたあと、鞣し具をつかって毛皮の内側だけを鞣す。ときどき指先で塩をつまみ取り、これを皮にこすりつける。塩は防腐剤としての効果もねらったものである。こうして仕上がったアザラシ皮は、毛つきのものは、衣服や靴や袋物あるいは紐などに加工される。また、表面の毛を取り去った皮は太鼓や衣服や紐などにつかわれる。

2-4. 油の採取

ニヴフの人たちにとって現在でも調理に欠かせないアザラシ油は、夏季に捕獲したアザラシから採取する。冬季のアザラシの油はまずくて食用にしないという。

アザラシ油の採取方法はつぎのようである。まず30～40 cm四方に大切りしてある脂肪層を、さらに長さ15 cm、幅5～6 cmでいどに切る。脂肪層の厚さは7 cm以上ある。すでに述べたが、この方形の脂肪片の中央には短い切れ目が入れてある。しかし観察した限り、切れ目は油の採取工程と直接的に関係がない。この切れ目は、肉片の場合にはかならずといってよくみられ、サケ、マスなどをそいだ身の乾燥のための紐孔としてつかわれる。肉や魚の裁きかたの伝統的手法であるとおもわれる。

水を張った鍋に細く切った脂肪層を入れ1時間ほど煮てから、冷ます。煮てもほとんど大きさは変わらない。ついで、一片ずつ脂肪層を取り出して、まな板の上に置き、



写真11 乾燥させるために木枠に張る（裏面）。

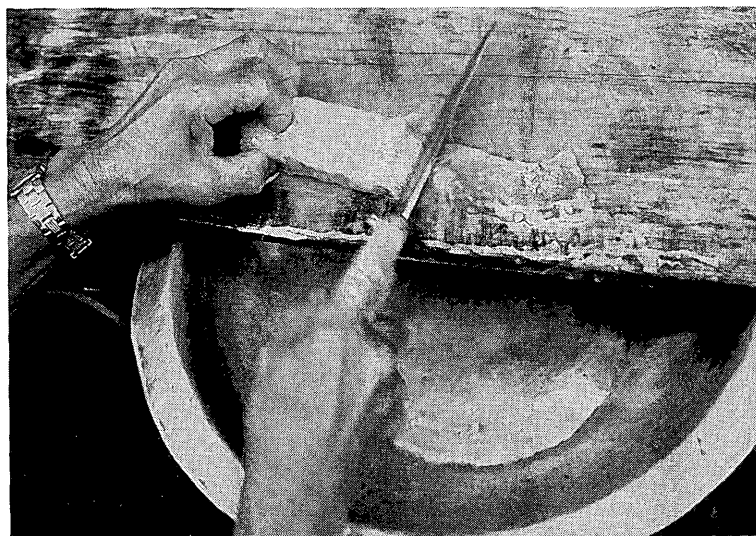


写真12 煮た脂肪から刃先でしごくようにして油を採る。

小刀の刃で表面をなぞるように圧迫して、油を絞り出す（写真12）。これによって驚くほどの量の油が流れでる。油はまな板の下に置いた容器に貯める。まな板に広がった油はときおり小刀で寄せ集めて容器に入れる。すべりやすい脂肪片をしっかりと手でおさえ、表裏を5～6回に分けて絞るのであるから、かなり根気のいる仕事である。油を絞りきったものは、いくぶん肉色をした厚さ5～6mmの繊維となる。これはイヌの餌にされる。

こうした手間のかかる伝統的油絞りは最近ではあまりなされず、ゾーヤも手回しの挽き肉器をふだんはつかう。能率のよい挽き肉器の欠点は、放棄される繊維層もこなごなにしていまい、それが油のなかに沈澱することである。油自体は、ほんのり黄色がかっているが、ほとんど透明といってよいほど澄んでおり、特有の匂いも少なく味がよい。アザランの油は、5人ほどの家族であれば、猟が容易になる氷のとける春までを目安に3頭分ほど保存すればよいという。アザラン油は冬は変色せず味も落ちないが、夏近くになると暗所に置いたものでも褐色になって、異臭を放ち味もわるくなる。

アザラン油は現在ではブリキ缶や広口瓶に入れて貯蔵し、ウオッカの空いた小瓶などに小出しして用いている。かつてはアザランなどの海獣の胃袋を乾燥させた容器に入れていた。

2-5. 胃袋製の油入れ

アザランの解体のときに胃袋は傷をつけないようにていねいに切り離される。その後、内容物を水でよく洗い出して一方の口を紐で縛り、もう一方の口から息を吹き込み、風船のように大きくしながら弓なりになったヒョウタン形に整えたあと、この口も結束する。つまり両端の口は一本の紐で縛られ、ちょうど弓の弦ようになる。こうすると竿や釘などに掛けやすい。いくらか乾燥させたところで、表面の無駄な肉片などをそぎ落とし、きれいなあめ色に全体を仕上げていく（写真13）。乾燥の頃合いをみて、短く伸びた腸の部分の表面にナイフを入れて数本の筋目をつける。一種の装飾の趣にもなるが腸の表面を十分にふくらませるためである。時期にもよるが、1か月ほどで完全に干し上がる。油の出し入れ口は腸がすこし残された方に取りつけられる。乾燥して固くなった腸を輪切りにして、ここに木の栓をつくって嵌め込む。胃袋をつかった容器は「ヒウス」と呼ばれ、その容量は10ℓぐらいで、アザラン1頭分の油は入りきれないという¹¹⁾。同様のものは、トドやオットセイの胃袋でもつくれる

11) 本稿で取り上げた「ヒウス」は1993年9月に製作に着手され、同年12月に完成した。ゾーヤ



写真13 アザランの胃袋でつくった油入れ。

が、ゾーヤによればアザランが一般的である。『蝦夷島奇観』[秦 1982 (1800)]などの記録によれば、アイヌではトドが一般的であったとみられ、クマの膀胱でも油入れがつくられた。

3. アザラン送り儀礼

3-1. 頭骨の処理

ニヴフにとって重要な意味をもつアザランの頭部は、慎重に処理される。ゾーヤの手順はつぎのようなものである。先に詳述した解体当日の最終場面において、頭部の処理がなされる。頭部は鼻面を中心に毛皮や髯がそっくりついたままの状態である。

ノヤから筆者に贈られた本資料は、現在国立民族学博物館に所蔵されている（標本番号 H196308）。

この後頭部中央の皮を小刀で切り開き、脳を保護している骨の部分を直径6~7 cmほど露出させる。この露出部分に、手ごろな石を握って振り下ろして骨を打ち欠き、脳を小刀の先や指をつかって掻き出し、特別に用意した容器に入れる。全体で300 gほどの白っぽい脳の採り出しが終わると、両方の眼球を小刀でえぐりだす。このとき眼球を覆う膜が刃物で破れて粘液質の硝子体が眼窩のなかに流れ出すと、これを指先でいねいに掻き出し、脳を入れた容器とは別の広口ビンに入れる。眼球を採り出してしまつて空になった眼窩と鼻腔の両者あわせて4つの孔には、乾燥させた直径1.2 cmほどのユリ科の球根¹²⁾を押し込む。なぜユリの球根をつかうのか、もはやゾーヤにもその意味はわからなかった。しかし、クレイノヴィチも、肉をそぎ落とされた頭骨の眼窩部分にユリの球根を挿入することを観察している【クレイノヴィチ 1993 (1973): 120]。こうして脳を除去された頭骨と、眼球の膜や硝子体の納められたビンは蓋付きの大きなバケツにしまわれた。

脳を食することは、ゾーヤにとっても格別のものらしく、解体を行った翌日の食事のときに、彼女ひとりで真っ赤な血液と混ざった脳の入った碗を膝の上にかかえて食べてしまい、筆者はもとよりアザラシを射止めた息子たちにも勧めることをしなかった。ニヴフの民族誌に関する事ならばなんでも語ってくれ、所持する民具をみせたり料理を味あわせてくれる親切なゾーヤではあったが、すこし味をみたいとは、どうしても筆者は言い出せなかった。おそらく、ゾーヤの息子でも口に合わない味覚世界のもので、誰にも勧めなかったのであろう。このときはゾーヤは、なにも味つけしない脳を、ひじょうに大切にしながら賞味していた¹³⁾。

頭部は毛皮や肉をつけたまま水だけでゆでられる。約1時間ほどでゆで上がる。はじめに、鼻面についた髯を1本残らず手でむしり取る。髯は半透明で太さは1 mm、長さ10 cmほどあり、むしった先から、脳を除去した後頭部の孔に押し込む。ついで鼻面から口唇付近にかけて、小刀で一気にそぐ。鼻孔に切断されたユリの球根がみえる。鼻面のそいだ肉片は食べないで後頭部の孔に入れる。さらに頬や眼窩のまわり、また、下顎骨についた肉をたんねんにそぎ取り、食用にできる肉のすべてを容器に盛る。この作業によって下顎はふたつに分かれてしまう。頭部のすべてを骨だけにする

12) このユリは、ニヴフの家庭に常備されており、特別な料理のときにつかわれるものである。球根の中央に糸を通して数十個を連ねた状態で乾燥保存されている。乾燥時の大きさは直径1.2 cm前後で、ひとつの球根は6~8個の鱗片からなっている。種の同定は現在のところできない。

13) 別の機会にアザラシの脳の食べ方をゾーヤに尋ねたところ、塩・胡椒とタマネギのみじん切りを混ぜて食べることもあるということであった。



写真14 縛り終えたあと、ベリーを口先に塗りつけてアザランの霊に捧げる。

縛る。この草はハマニソニク（テンキグサ）で、高さ50～100 cm、葉の部分は長さ20～40 cm、幅7～12 mmで細長く先端がとがった形状のものであり、両手で引っ張ってちぎることが困難なほど丈夫な繊維である¹⁴⁾。縛り終わったあとコケモモを口先に塗りつけてアザランの霊に捧げる（写真14）。この頭骨および眼球の部分を入れた容器はバケツに納められ、飼育しているネコやイヌ、あるいはカラスに荒らされないように蓋をして屋外の炊事場付近に置く。

これで頭骨に宿るアザランの霊送り儀礼の用意は完了した（写真15）。あとは、波しずかな海にもって行って、アザランの世界である海に霊をもどす手続きをするだけである。霊送りは、アザランを捕獲した男の手ではなく、女性によって執り行われる。しかしなるべく沖に出て、頭骨を海に降ろすことがよいという。それには男たちの舟

14) ハマニソニク *Elymus mollis* Trinius, これを乾燥させた繊維で丈夫なバスケットがシベリアや北アメリカの北西海岸諸民族で編まれた。テンキグサという和名もアイヌが「テンキ」とよんだ精巧な編み容器に仕立てたところに起因する。



写真15 下顎も一緒にハマニソニクで縛り、化粧を施したアザラシの頭骨。

に乗せてもらい沖まで出なければならない。

3-2. アザラシ送り儀礼

男たちが漁に出かけて、いくら待っても舟は戻ってこないために、ゾーヤは自分の手だけで可能な浜辺での霊送りを行うことを告げた。筆者が夕刻には20 kmほど離れた街まで引き上げなければならないことを知っているゾーヤの好意である。

まだ太陽が高くのぼっているサハリンの夏時間の午後5時に、ゾーヤはアザラシの頭骨と眼球の入ったバケツをもって、西南方向に海岸まで歩いていく。ちょうど、太陽のある方角をめざしている。ゾーヤのかたわらには、ぴったりとイヌがつき添っていく。ロマノフカ川の河口沿いにいけば距離は近いのだが、ゾーヤはそれをさけ、人けのない自然砂丘をこえる道を1 km以上も歩き、人工物などのない海浜を目指す。

海岸に着くと、頭骨の後頭部の孔に広ロビンに入った眼球膜の部分と硝子体を一緒に注ぎ込む(写真16)。そして、しずかにうち寄せる波打ち際に立って、「どうぞ、仲間のいる海にお還りください。こんど来るときは、たくさんの仲間をつれて来てください」という意味の祈り詞をニヴフ語でささげた。このあとゾーヤは数歩海に向かって歩んだあと、手にもった頭骨の先端を前に向けてはるかな海のかなたに帰還するよ



写真16 海へアザランの頭骨を送り還す直前に障子体などを眼窩に入れる。



写真17 祈り詞をとなえたあと、アザランの頭骨は海へ還される。これによってアザランの霊は「水の主」のもとに帰還する。

うに投げた（写真17）。投げられた頭骨は海面に小さな飛沫を立てて一瞬にして没し、円い波紋がいくえにも海面にひろがった。これで、アザランの霊は海に還ったのである。

大陸のニヴフの村クゥリにおいても、同様の方法でアザランの頭骨を女性が海へ沈

めることがクレイノヴィチによって報告されている。そして霊を送った頭骨の数だけ岸辺で小石を拾って家にもって帰り、炉に置く。これは猟に手を貸してくれた「火の主」に対する報酬のようなものであるという [Крейнович 1934]。ゾーヤも浜辺で小石をひとつ拾い、家にもち帰った。アザランの霊を送ったときにならず拾う習慣だからやるが、そのことがどのような意味があるか分からぬとゾーヤはいう。

海岸に着いたとき、同行したひとりの女性の髪が乱れ、風に吹かれるままになっていた。それに気づいたゾーヤは、「そのように乱れ髪ではだめだ。きっちりと縛りなさい」と命令した。ふだんは寛容なゾーヤのこの厳しい態度は、筆者にとって驚きであった。また、はるか沖で漁をしている小舟をみつけると、「舟を入れて写真をとるな。不漁になるから」と筆者にむかって大声で警告した。このふたつのことがらが、なぜ禁忌なのかあとで聞いたところ、次の理由からであった。この儀礼は神に関することだから、髪はニヴフの伝統である形に整えなければならない。また、写真については、海への霊送りの場面に漁をしている姿が入るのは、海の神に対する冒瀆である。

ゾーヤは大陸のアムール川河口の街ニコラエフスク・ナ・アムーレから30 kmほど遡ったチールの対岸の寒村で1918年に生まれた。そして、少女時代は海岸のニヴフの村ブイルで育った。このブイルからは、はるか沖合いにサハリンがみえ、結氷する厳冬季にはイヌ橇で両地を往来できた。18歳のときに、サハリン北部の西海岸リュヴィノィエのニヴフの家に嫁いだ。夫の死後はおもにサハリン西海岸各地で生活し、再婚した夫とも死別した。1982年から現在のルプロワに居住している。したがって、ゾーヤの継承している伝統文化は、およそアムールとサハリン西海岸のものとみてよいであろう。おなじルプロワに居住する女性ラリク・ボギユンも、父親たちは大陸からきたという。サハリン北西岸とアムール川河口付近のニヴフは、交易や婚姻あるいは治療のためにシャマンを招くなど両者の往来は頻繁にあり、予想以上に緊密な同族意識が成立しているようである。

なお、儀礼の対象となる獣肉の共食のさいには、特定の獣形モチーフを配した容器やスプーンなどがもちいられていた。筆者はルプロワにおいて、こうした用具をみることはできたが、実際につかわれる場面に居合わせることはできなかった。これらの古い様式の儀礼用具は、現在ではほとんど使用されない。父祖の時代から継承されてきたこれらの技巧をこらして製作された用具を所持することの意味は、自己の民族的アイデンティティや家筋の由来を物語るものとされて大切に保管されている。

3-3. サハリン東海岸のアザラン送り儀礼

これまで、サハリン島北西岸のルプロウにおける事例を中心にみてきた。すでに触れたようにルプロウは、ニヴフ語のふたつに大別される方言のひとつのアムール方言地域であり、言語ばかりでなく木彫技術や文様のモチーフなど文化要素にも一目で識別できる差異が現在でも認められている。そこで、島の北半部の東海岸を中心とするサハリン方言の地域と比較することが求められる。サハリン方言の中核的な街、ノグリキの南郊に位置するカイガンで1992年8月に行われた事例と、カタングリの集落に居住するアザラン猟に卓越した猟師からの1993年9月における聞き書きを記述しておきたい。

ちなみにカイガンの地名は、第二次大戦の日本敗戦まぎわまでこの地で石油生産に従事していた日本人の名づけた「海岸」に由来する。いわゆるシベリア干渉事件を契機として1920年に日本は軍事行動を起こし、北サハリンを占領した。日本はソ連と交渉して、北サハリンの石油と石炭の資源獲得の45年間におよぶ利権を手にして1925年に北サハリンから全面的に撤退した。この利権は1944年まで存続し、日本は民間会社を支援して国内に乏しい石油採掘事業を北サハリンにおいて行ったのである。現在でも、当時の石油タンクが赤錆びて多数放棄されたままになっている。以下はこの石油タンク群のかたわらのカイガンにおいて観察できたものである。

【カイガンの事例】

観察対象となったアザランは、当日の朝に潟の奥に位置するカイガンの対岸に発達した砂洲上の良好な猟場であるナビルにおいて、鉄砲によって斃されたものである。急所である頭部の目の直上を一撃されていた。長さは80 cmほどのゴマフアザランで、この種のなかではあまり大きいものではない。解体はニヴフ女性の手で8月28日に行われた。彼女はノグリキに居住し、カイガンで漁や猟の手助けを日常的にしていた。ルプロウで解体されたアザランより小形であったのか、あるいは時期的に早いために脂肪を蓄えていなかったためか、いずれとも断定できないが、脂肪層の形成はきわめて薄いものであったことが注目される。

はじめに両方の前鰭と尾鰭を切断し、ついで首の回りを一周するように小刀で切れ目を入れたあと、腹部に浅く縦に一直線に切り裂いた。その裂け目の中央付近から徐々に毛皮を剥ぎ取った。ルプロウの場合と異なる剥ぎ方で、脂肪の大半は肉に付着させるようにナイフを入れた。脂肪層の厚さはおよそ2 cmであった。剥ぎ取った毛皮



写真18 毛皮が剥がされると、男は鱧を焼き始める。波打ちぎわには毛皮をもつ女性が立つ。

は、すぐさま海に運び膝くらいの深さのところまで水洗いした。海面に毛皮全体を強くたたきつけ、さらに左右に振って洗った（写真18）。

つぎに残った部分の処理であるが、まず目と鼻面周辺の毛皮は付着したまま頭部が切断された。左右の眼球は、くり抜くときの刃物によって破れて液状の硝子体は流れ出してしまっていて、眼球自体は「黒っぽい部分を含んだ眼の皮」という表現が適当である。この眼の皮を解体の場所近くに、摘出と同時にすばやく埋めてしまった。渚の砂地を片手が入るほどの穴を手掘りしておき、瞬時に納めた。穴は、ていねいに平らに埋め戻されたが、イヌなどの餌にならないようにするためである。眼球を渚に埋めるのは、アザラシが再生し、ゆたかに猟が持続されることを願うためで、この地域におけるニヴフの慣習だということであった。ルプロワの事例とは眼球処理の方法が異なることは興味ぶかい。

脂肪層を剥ぎ取ると、赤褐色の肉はほとんどなく骨にわずかに付着する程度であった。脂肪は、大きな三つのブロックに切り分けられた。また眼球を除去された頭部は、いくつか切断された骨付きの肉塊とともに、食用にするために袋にしまわれた。頭部の脳はこのときはすぐには摘出されなかったが、後刻食用にされ、また頭骨送りの儀礼も行ふということであった。しかしその儀礼の詳細を聞き取ることはできなかった。

【カタングリでの聞き書き】

カタングリに居住するアナトリィ・カヴォースクは、1940年生まれの比較的若い人物ながら、すぐれた伝統文化の継承者として知られ、漁期にはカタングリ潟に形成された砂洲上の漁撈拠点ナビルにおいて活動している。カヴォースクは、トゥィミ川上流のニヴフの村チルウクトゥで生まれ、1956年にカタングリにやって来た。漁撈をするには、ここが最適の場所であるからという。

カタングリにおけるアザラン猟は、割れた氷が流れてくる1月と、マスやサケを追って海岸近くに寄ってくるアザランがひんばんに水面に顔を出す9月が最適である。カヴォースクは1年間に約30頭のアザランを獲するという。彼は子どもたちが好むアザランの乾肉をたくさんつくって食べさせることを生きがいにしているとのことである。毛皮も家族の靴や帽子や服に仕立てるのにつかう。毛皮は自家消費してしまっていて売ることはない。

冬にとれたアザランの油は、「マスクガイ」と呼ぶが、うまくないので食用にしない。夏のそれは「カドゥ」という。夏の油は味がよく、多様な料理につかわれる。アザランは成長にしたがって呼び名が変化する。生まれたばかりのアザランは「コウプ」、1歳は「ヒャト」、2歳は「キャガキ」、3歳は「タグイススク」、4歳は「ケトルリィ」というぐあいである。

アザランの解体のさいに取り出した眼球は、シラカンバ製の特別の箱に入れ、これと一緒に頭骨も海にもっていく。頭部はゆでる前に全体を草¹⁵⁾で包み、ヤナギの削りかけを鼻の孔に入れる。先述の筆者が観察記録をとったゾーヤの場合は、頭骨の化粧に削りかけを用いることはなかった。削りかけの材料が送り儀礼の当日、手に入らないので省略したという。後述するクレイノヴィチの報告によれば [1993 (1973)], 鼻孔に削りかけを挿入することを行っているが、この方法が古くは広くニヴフ社会に普遍的にみられた可能性がある。カヴォースクの知るかぎりアザランにかぎらず海獣の血はいっさい飲まないという。

このカヴォースクから、以上のことがらを聞くだけでも娘の熱心な助力が必要であった。なぜなら、彼は非常に酒好きの人物で、ほとんど素面でいることがないからである。しかし、狩猟や漁撈などの伝統文化に関する体験と知識はきわめて豊富であり、サハリン州郷土博物館の研究者も重要なインフォーマントとしているが、聞き取りの記録はなかなか進まないということであった。

彼の卓越したアザランの捕獲あるいはサケ・マス漁の技術を発揮して十分な獲物を

15) この草もハマニソクであろう。

得ることができるあいだは、酒浸りから逃れようがない状況にある。ロシア社会の経済的破綻は、彼のような漁業生産者の収穫物をねらってウオッカを貨幣がわりにして、直接取り引きする悪徳商人の跳梁を許している。もしもこの不当な交換を拒否したならば凶暴な殺人も平気で起こす者たちであるために応じざるをえない。社会主義ソ連の時代から、少数民族に対して実施されてきた特別な漁獲割り当てが、悪徳商人の絶好な標的となって、さまざまな悲劇を生み貧困を増大させている現実がある。

先述した「民族村」にも、カヴォースクと似たような状況にある者が少なくない。そこで、先住民族の先住権を認めて、環境保全をはかるべきだという声が、全島民のあいだからあがりはじめている。人口の8割以上を占めるロシア人をはじめ多くの民族から共感を呼んでいる。これを反映して、石油や天然ガスの採掘などの開発による海や川の汚染とツンドラの破壊から先住民族の土地を保護して、漁猟やトナカイ飼養の可能な環境を保全するための「サハリン州北方諸民族の伝統的自然利用の領域に関する条例」が1991年にサハリン州議会で決議された。しかし、この条例はすでに開発事業がなされているところと計画中のところは除外するとなっており、実際の規制力にとぼしいことに問題がある。

3-4. 先行調査報告との比較

これまでの記述は、筆者の現地調査で得たデータによるものである。しかし、きわめて近似した内容のアザラシの霊送り儀礼を、すでに60年以上前にロシアの言語学と民族学に関するすぐれた業績をあげたクレイノヴィチが調査している。この調査は日記体の論述にまとめられて、1973年に公表された。この著作は現在までに公表されたニヴフの伝統文化に関する最良の調査研究報告のひとつであり、もはや失われてしまった事柄についての貴重なデータが数多く盛り込まれている。しかし惜しいことに、データを得た具体的な調査地やインフォーマントについての記述がほとんど欠落している。たとえば本稿の内容と関連するものは、1926年8月5日の欄に「海獣の狩猟」として記述されている。筆者の観察と聞き取り調査によって得られなかったものは、つぎのような点である【クレイノヴィチ 1993 (1973): 120】。

「アザラシの頭の肉は異氏族の人間とされている姉妹と娘に食べさせる。頭の肉が平らげられると、(中略)男性がサルヤナギで特製の削り掛け——ウフルッシブル——を削り、アザラシの鼻孔に突っ込む。それからコケモモを取って、その液で削り掛けを赤く着色する。その後空になった眼窩にユリ根を挿入する」。

これらは、インフォーマントはもとより調査地も特定することができないもので、

ニヴフの一般論という体裁になっている。

しかし、1934年にクレイノヴィチが「クゥリ村ギリヤーク族の海洋狩猟」と題して『ソビエト民族学』に発表したクゥリ村を中心にしたアザラン猟の報告は、きわめて具体的である。アザランの捕獲法や肉の分配や頭骨の処理などが記述されている[Крейнович 1934]。クゥリ村は大陸のオホーツク海に面した位置にあり、いわゆるアムール方言の範囲にある。

これらクレイノヴィチの記録したデータと比較すると、本稿において記述した内容に驚くほどの類似があり、ゾーヤをはじめとするニヴフ古老の頭骨の処理や霊送りの儀礼、ひいてはその背後にある精神的世界が現在も保持され継承されていることはきわめて印象的である。

ニヴフの精神的世界の把握については、タクサミの論考[TAKSAMI 1968]がある。これによると、ニヴフの人たちにとって、もっとも重要な霊は「水の主(ぬし)」すなわち「海の主」である。海は大きな家になぞらえられ、そこには「水の主(トオル・ニヴフ)」が、白髪の老人あるいは老婆となって住んでいる。「水の主」は魚の卵や鱗を所持しており、これを海に投げ入れて、たくさんの魚や海獣の群れをニヴフたちに獲物として贈与してくれる。ニヴフにとって、食糧や衣服など日常の生活材の大部分をまかなう「海の主」の贈り物は、このうえのない貴重なものであるから、とうぜんの位置づけである。したがって、「水の主」に対しては丁重な儀礼が執り行われる。たとえば春先に海や川の一面に張った結氷が解けて水が動き出すと、舟を漕ぎ出して、水中に削りかけや供物を投じ、ゆたかな恵みを願って祈りを捧げる。漁猟で獲物を得たときにも、感謝をあらわすために食べ物やタバコなどの供物を捧げたのである。

この「水の主」について重要な存在は、「森の主」あるいは「山の主」である。森や山には、陸獣をはじめマツの実やコケモモなどの実果類などを授けてくれる「森の主」がいるとされた。このほか「火の主」や「天の主」などさまざまな「主(ぬし)」が存在し、地域や氏族集団ごとに多くの差異をもちながら、精神的世界を形づくっていた[大塚 1987]。

1905年から1945年までの南サハリンに対する日本領有の時期にも、日本人研究者によっていくつかの調査が試みられている。1928(昭和3)年にポロナイスク(敷香)でニヴフの言語を調査した高橋盛孝は、アザランに関して若干の聞き取りを行っている。たとえば猟のときに、「あのあざらしと指さしてはいけぬ。平手で示す。あざらしを舟に積むときは頭を舟尾の方に向ける」[高橋 1942: 89-90]。このような禁忌については、服部 健も1941年から3年間にわたってニヴフの調査を行い、以下の記

述をしている。

家の男達が、漁や猟に出ている間は、家の中を掃除しても塵をはき捨ててはいけない。木の皮は裂いて縫い合わせることもいけない。又、氷をこわしてもいけない。これらにそむいて塵を捨てると風が強くなり霧がかかる。洗濯の水を捨てると波が荒れる。氷をこわすと漁に出た人の乗った氷が割れて、戻れなくなる。ただし出かける前に、これらのことを告げて置けば良い。もし誤って、器具や氷をこわしたら、出漁中の家人の名まえを大声で呼び、そのことを告げる [服部 1956: 121-122]。

家の者が漁に出ている時には、肉や肉汁を入れる鍋の内容物を捨ててはならない。このようなことをすると漁がなくなる [服部 1956: 122-123]。

沖に出た家人が氷に乗ったまま帰って来ない時には、家にいる者は衣服を脱いで寝てはならない。家人は体を冷やさぬ様にしていれば沖に出ている人も寒くない [服部 1956: 123]。

家人が漁猟から帰って来た時、家の中からのぞいたり、首だけ戸外へ突き出して見ていてはならない [服部 1956: 123-124]。

このように、狩猟や漁撈に出かけた夫や息子たちが獲物を得られるか否かは、家に残った妻や娘など家族も含めて、獣や魚を支配する「主」との儀礼をとおした互酬関係が必要と考えている。そのためには、人間に獲物を遣わす「主」の気分を損ねない緊張を漁や猟の期間中に守るべき禁忌が数多く存在する。ゾーヤの遵守する禁忌については、先述したところである。

3-5. アザラン送り儀礼についての周辺諸民族との比較

[ウイルタ]

ウイルタが少なくとも19世紀初頭にはサハリン島中部東岸のボロナイ川流域およびタライカ湖周辺のツンドラ地帯でトナカイ飼養を生業の基礎にしていたことは、諸記録によって明らかである。わけでも1857（安政4）年に蝦夷地探索に派遣された佐倉藩士須藤兼徳の奥書がある市立函館図書館蔵の『北蝦夷画帖』には、自筆であるか否かはともかく、ウイルタのアザラン猟についての観察が的確に図示されている。それは、「シツカ川の側にてヲロッコ夷海獣と鱒魚とを漁する図」（写真19）[池上（編）1979: 46] や「水豹を獲たる図」（写真20）[池上（編）1979: 62-63] などである。ここに描かれたアザラン猟は夏季に行われた光景である。その猟法は、川に遡上するマスを追って岸边近くに群れるアザランを陸から銚のついた特殊な形態の猟具をつかっ

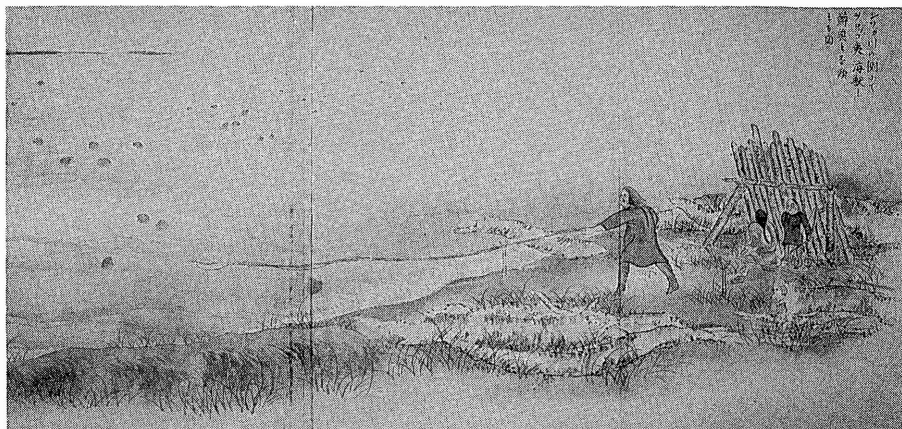


写真19 左手の海面に頭を出すアザランを浮き枝つきの銚をのぼしてねらう場面。『北蝦夷画帳』より。

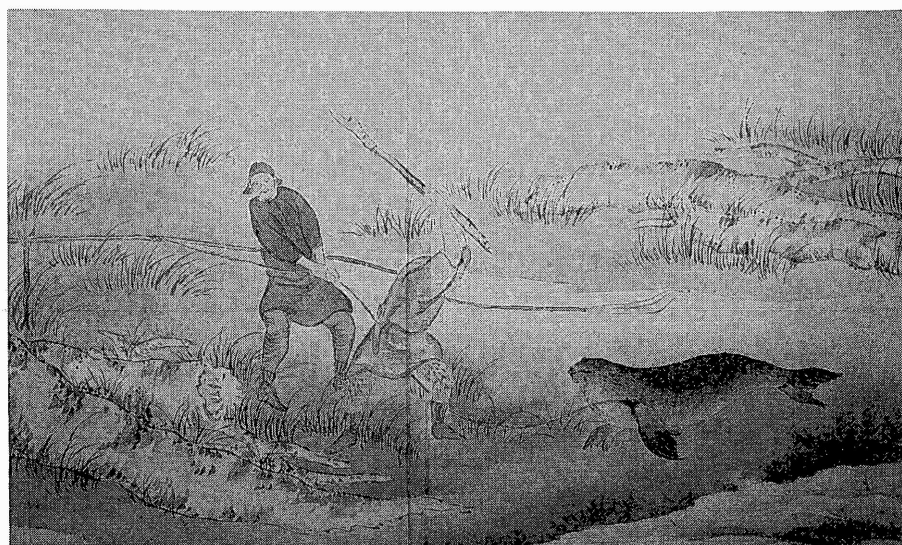


写真20 銚を射込まれて陸にひきあげられた手負いのアザランを棒で叩き殺すところ。『北蝦夷画帳』より。

て刺突して捕獲するものである。この猟具は、最先端に位置する銚を浮き板が支え、後に長い棒が取り付けられたものである。銚は鉄でできており、その根元に紐穴が開けられ、アザラン皮製の長い紐が棒伝いに伸びている。図では、紐が銚を射込む者の手元まで伸びている様子はうかがえないが、実際は、浮き板の先端からはずれてアザランの体内に射込まれた銚をたぐり寄せて、特別な棒で撲殺する。浮き板は、柄の棒

を支えて水面を滑るようにアザランに接近し、また銚の存在を悟られないようにカモフラージュする役目もはたす。この絵図からは、棒をいくつも繋いだ柄の重量を分散させるために、陸に二股の枝を打ち込んでいることも分かる。アザラン猟に限らないが、この形式の銚は獲物を確実に掌中にできる巧みな仕組みの道具である。『北蝦夷画帖』には解体の様子は描かれていない。

犬飼 [1941] によれば、アザランの解体は、腹を上にして、まず臍から顎まで毛皮と脂肪層を切り、ついで逆に臍から尾鰭の付け根までを切る。このような作業をへて、頭部をつけたままの毛皮として、肉塊から剥ぎ取る。住居に運び入れたのち、頭部を切断する。後頭部を破壊して摘出した脳は生で食べる。えぐり出した眼球は、海に投げ入れる。眼球を海にもどさなければ、漁具が破壊されたり不吉なことが起こるとされた。

【アイヌ】

アイヌにおけるアザラン猟は、17世紀の幕藩体制の成立以前からさかんに行われていたことが確実である [大塚 1966, 1977, 1992a, 1992b]。ふるく18世紀末の様相については、秦檜磨の『蝦夷島奇観』にワモンアザランが図示されている。しかもこの図にはアザランについての解説も付されている。その解説文には『吾妻鑑』が引用され、その文治5(1189)年9月17日条にある以下のような雲慶の記事を述べている。

「トカリ 水豹なり。大サ五六尺。／全體黒色、豹文白明なるを鼈甲／斑とて最上とす。炭色の品多し。／一種全身に大水字の文理あるも／有。西夷地テシホ海邊に産り。／東鑑日、佛師雲慶へ佛工料に／おくる七間間中径水豹皮／六十枚とあり」 [秦 1982 (1800)]。この記事は手塩を含む北海道における状況を示したものである。

つぎに具体的な調査例について述べてみたい。

サハリンのアイヌにおけるアザラン猟については、知里真志保・山本祐弘の調査がもっとも詳細である [知里・山本 1979]。調査のデータは、1940年に知里がサハリンの豊原高等女学校に赴任し、島を離れる1943年までに聞き取りしたデータが主体とみてよいであろう。アイヌは伝統的に北緯50度線よりも南に居住してきたが、当時はおよそ七か所の居留地に集められていた。そのひとつである白浜コタン（集落）を中心とするアザラン猟について記述されている。知里が訪れたときは、「キテ」と呼ばれる銚による捕獲のゆたかな体験者はまだ存在したが、猟のすべては鉄砲によって行われていた。白浜に冬季に回遊してくるアザランはアゴヒゲアザラン *Erignathus barbatus* とワモンアザランであり、これに少数のクラカケアザランがみられる。猟期は

1月から4月までで、氷上で行われ、5月から6月半ばには海上でのゴマフアザラシ猟が行われた。

伝統的な冬季の猟法は忍び獲りによった。これはアザラシに鉾を投げつけられる距離まで接近するもので、「イクィラ（忍んでいく）」とよばれた。白浜周辺の東海岸は沖合い約24 kmまで凍結するが、危険を冒してでも半分の距離の12 km近くまで出なければ、氷盤の割れめから出て氷上で休むアザラシの姿はない。アザラシに悟られないようにイクィラして、3 m前後まで接近して斃す。このとき氷の陰にかくれて鉾のついた柄を継ぎ足したり、白い布を被ってカムフラージュすることにもなされた。イクィラの際には近づくまでにアザラシが逃げないように、イケマの根を噛んでブッブとアザラシの方へ吹きつけて呪文を唱えることもした。また、氷がすっかり溶ける季節には岸から遠くないところにトドマツの木を浮かせて重りで固定して置き、この上で休んでいるアザラシを獲る鉾猟も行った。

アザラシの皮剥ぎは、男たちの手で「マキリ（小刀）」で行う。剥ぎ取った皮は小型のものは家の外壁に釘で張りつけて干すが、大型のものはトドマツの枝を輪に曲げて作る木枠に張る。油の採取に際しては、脂肪のかたまりを鍋でよく煮て、上層にたまった澄んだ油をすくいとり、トドやアザラシの胃袋製の容器に入れて蓄える。油は食用だけでなく灯火にも用いる。

肉は刻んで煮てコタンの人たちにふるまう。内臓はすべて食用にする。胆嚢は囲炉裏の上で干し固めて保存し、腹痛のときなどに削って飲む薬として大切にされる。骨は「神の形骸」とされ、できるだけ清潔なところにまとめて捨てるが、頭骨だけは特別な処理をする。冬には氷上に木幣を立てて、これに頭骨をつけて霊送りを行い、夏であれば頭骨を「キケ（削りかけ）」で包んで海中に投げて霊を送る。肝心の頭骨の処理については簡単な記述があるだけであり、ニヴフのゾーヤの執り行ったものとの比較は十分にできないが、基本的な儀礼様式は類似したものとみてよいであろう。

北海道の斜里アイヌは、最初に捕獲したアザラシを流水の上で解体し、腸の一部を「レブンカムイ（海の神）」に捧げる。陸に運んだアザラシの頭骨は、家の付近の木の根元などに置かれ、アザラシ猟が終了すると、「シトイナウ」とよぶ削りかけをつけて海に帰し、ふたたびアザラシになって来るように祈る【更科 1955】。

おなじく北海道の美幌アイヌでは、頭骨から脳を抜き出して煮て食べた。眼球も摘出し、そのあとに「イナウキケ（削りかけ）」を詰め、さらに頭骨全体にもイナウキケを簡単につけて海に投げる【犬飼 1969】。

4. 送り儀礼についての若干の考察

最後にアザランの送り儀礼の成立と展開について、これまで提示した資料をもとに若干の考察をしておきたい。

ニヴフにみられるアザランの脳の摘出をとまなう霊送り儀礼は、きわめて様式的に整ったものである。獣のなかで中心的存在であるクマに対する儀礼とくらべると、饗宴に集う人間関係や社会的な意味などでは異なるとはいえ、獣を殺害し、毛皮や肉は人間へのプレゼントとして受け取り、霊が宿る頭骨処理とこれを海に還すというプロセスと、これを支える観念は同一のものとみてよい。ニヴフに顕著にみられるアザランの霊送り儀礼は、いつの時代にどのような背景のもとに成立したのであろうか。この問題を考えるには、ニヴフの居住地域と重なり、さらに大きな分布領域をもって展開した10世紀前後を中心とするオホーツク文化を検証する必要がある。この文化はきわめて特徴的な遺跡や遺物などの考古学的資料分析から確認されたもので、これから得られるアザラン送りのデータと現実のニヴフのそれとの比較はかなり制約される。

考古学的に送り儀礼の存在を裏づけるには、頭骨が特別な場や施設におい丁重にあつかわれ、しかも頭骨自体に宿る霊に対する観念の象徴的行為といえる脳摘出孔が認められることが不可欠である。さらに、送り儀礼の饗宴において用いられる特別な動物モチーフで飾られた木製や骨製の用具類の出土などによって、当時の儀礼執行の内容を復元することができるであろう。

アザランの脳摘出孔をもつ頭骨はオホーツク文化の遺跡には現在のところ認められない。しかしオホーツク文化においては、ヒグマやトドなど一部の獣頭骨に脳の摘出孔が確実に存在することが注目される。摘出孔をもつ獣頭骨は、意識的に脳を取り出したことを意味するが、ただちに脳を食用にしたとみたり、送り儀礼を執り行ったという証明にはならない。しかし送り儀礼自体の存在は、住居址内部に設けられた特別な頭骨集積の址や、住居址に接する頭骨送り場と推定される遺構によって確かめられる。また近年まで行われていた厳格なニヴフのクマ送り儀礼をはじめ、シロイルカやトド、それにアザランの送り儀礼は、共通する霊送りの思想を基盤とする行為である。さらにクマ送り儀礼において顕著であるが、特徴ある形態や文様で飾って様式化された「煮たクマ肉を盛る容器」や「クマ肉を食するスプーン」などと同一のものとみなされる用具類は、オホーツク文化にも存在することが最近の発掘調査で明らかである。

オホーツク文化はおよそ8世紀から12世紀にわたっての時期に存続したとみられ

る。この文化の担い手たちは北海道において、網走のモヨロ貝塚を残したことでよく知られるように、オホーツク海沿岸を中心に根をおろし、クリール列島の全域にも存在した。さらにサハリンにおいては、ほぼ島全域に文化的痕跡を色濃く残している。オホーツク文化の成立はアムール川下流域からサハリン北部を含む地域であると筆者は推定しているが、当該地域における考古学的な調査例はわずかしかなく、ことに送り場の発掘がほとんどなされていない。ましてアザランの送り儀礼について論じるだけの資料は未検出である。この事実をもってニヴフとオホーツク文化の違いを強調することも可能であるが、むしろ筆者はオホーツク文化においてもアザランに関してはニヴフと同一様式の海での頭骨送りを行ったために発掘されないのではないかとみたい。

そして重要なことは、海獣狩猟を高度に展開したオホーツク文化は、その成立のはじめから特定の獣に対して頭骸骨に孔をあける習俗をとまなっていることである。このことはオホーツク文化そのものが毛皮や海産物の交易経済を活発に展開し、きわめて集団組織原理の整った社会であり、その紐帯を強化したり確認しあう目的で、送りの観念が象徴性を顕在化させ、複合儀礼体系として確立されたものであろう。このような文脈のもとでアザラン送り儀礼が成立したのだとすれば、交易商品としての毛皮生産の増大が背景にあり、その絶えざる獣の殺害を聖なる観念体系のなかに華やかに位置づけて演出する必要が生じたのであろう。ある意味で狩猟対象獣との対話の独占をニヴフ自身が保持する行動様式としての役割を演じたのではあるまいか。つまり自分たちだけが送り儀礼の対象となる獣の捕獲のプライオリティを内外に誇示する振る舞いは、「獣の主」に対しても向けられたものである。人間と日常的に生活をともにするイヌは、「獣の主」の支配を受けず、飼育管理してきた死者への犠牲や先祖供養のために殺害することはあっても、送り儀礼の対象にはならない点を重視したい。「獣の主」の支配下にある獣はイヌと違ってたやすく殺害することはできないが、商品となる毛皮を得ることができ、しかも高価であることが多い。これと近似する思想は他の民族にもみられる。たとえばアイヌにおいては、クマやテンに対する送り儀礼は行いが、重要な主食的役割を果たすが容易に捕獲できるエゾシカに対する儀礼は存在しないか、もしくはほとんど希薄である。また、中国の大興安嶺山中に生活するエヴェンキにおいては、角や毛皮ばかりでなく胎児が高価に取り引きされるマンシュウアカシカに対しては丁重な送り儀礼を行うが、食料や衣服材料として日常生活を支えるノロジカに対してはまったく儀礼を行わない。

このようにみえてくると、送り儀礼の初源はともかくとして、毛皮交易の隆盛に対応

して獣送り儀礼が従来よりも加飾されて様式を整えたと考えたい。そして獣の殺害に関わる独占的な專業集団としての誇示が必要になり、これがある種の閉鎖性と秘儀性を強化した側面も考慮に入れるべきであろう。

ここで具体的に考古学的なデータの検証を行っておきたい。北海道各地のオホーツク文化の遺跡からは、アザラシ、トド、オットセイ、アシカなどの海獣類に対する霊送り儀礼を執り行ったと考えられる痕跡のある頭骨の出土が顕著である。この根拠のひとつは、頭骨の左右いずれかの側頭部に、鉄製の刃物による脳の摘出孔が明瞭に認められることである。オホーツク文化は、すでに述べたように10世紀前後の時期にもっとも成熟し、その担い手たちは漁撈と海獣狩猟に生産の基礎を置きながら、商品価値の高い毛皮や海産物などの交易活動を活発に展開したとみられている [大塚 1966, 1977, 1993; 天野 1975]。この時期に多様な形態の骨製の銚先が出現することは、良質の毛皮の需要に対応する発展であったとみたい。

礼文島浜中砂丘にあるオホーツク文化の遺跡から発掘された多数のトドと認定されている頭骨には、すべて脳の摘出孔が確認できる。最近、浜中遺跡が調査され、この骨塚から出土した海獣骨の種類を同定分析した西本豊弘によれば、最小個体数はアザラシ成獣3、幼・若獣4、トド成獣雄2、オットセイ成獣雄2、雌1、若獣1、アシカ成獣雄7、若獣雄1、若獣雌1であり、アザラシのうち種が判明したものでは、ゴマフアザラシが主体で、ワモンアザラシとみられるものも存在する [西本 1992]。これをみても、オホーツク文化において海獣狩猟がさかんだったことの一端は理解できるであろう。しかし、アシカの雄の3例には脳の摘出孔が認められたが、本稿で問題としているアザラシの頭骨には摘出孔が認められなかった。礼文島の香深井遺跡からは、トドの頭骨の左右に円形に穿たれた摘出孔の一例が発掘された。この頭骨は、現在までに発見されたトドの頭骨のなかでは最大の大きさをもつもので、年齢的にも最高齢である。この頭骨があまりにも巨大であることから、海の主と考えられて、それにふさわしい擬人化された特殊な儀礼が行われたものではないかと筆者は推測する。この見解が正しければ、海と山を軸とする世界観の体系のもとに、ニヴフにみられるような「主(ぬし)信仰」が、オホーツク文化の時期には確立していたことを示唆するものであろう。

ニヴフに限らず、シベリア各地の諸民族では、「主」は白い髯をはやした長老の姿をしていると信じられている。また通常の寿命よりもはるかに長命に達した人をうやまい、性を超えた存在としてみることはシベリアの先住諸民族には広範囲に認められる。そうした人物の死去にあたっては、一般的な親族を中核とするネットワーク的規

模を拡大した参列者と儀礼の内容をもつ、格別に丁重な葬送を執り行ったという。これと似た事例は、アイヌの儀礼伝統にもふるくから存在し、1800年ごろに成立したとみられる『蝦夷島奇観』には、長生きをした姥の死去のさいに、居住していた家屋と生活用具を焼いて、死後の世界での生活を安楽にすごせるように霊的存在にして送る光景が描かれている。

このような信仰の存在を示唆するとおもわれるオホーツク文化の遺跡には、羅臼町松法遺跡の焼失した家屋址がある。ここからは、現在のニヴフが用いる獣の霊送り儀礼のための容器類に酷似したものが出土している[涌坂 1984]。この家屋址が失火ではなく、故意に焼失させたものであれば、死者が死後の世界において、現世と変わることのない生活をいとめるように家財道具一式を霊的存在にして送った可能性がある。送り獣を形どった木製容器やその一部の彫刻を配した容器類やスプーンまでが数多く出土しており、これらはニヴフの送り獣の饗宴に用いられる儀礼用具体系とほぼ同一である。むしろ現存するニヴフの儀礼用の容器と比べても、造形的美しさはまさるほどであり、獣を形どった彫刻に込められた精神的意味づけの完成度の高い「主」信仰の存在なくしてはなしえないものであろう。

謝 辞

本稿の作成には多くの方々のお世話になった。はじめに、サハリンのニヴフ居住地における現地調査に協力を惜しまれなかったニヴフ民族の人たちに心から感謝をもうしあげたい。とりわけ、サハリン州ノグリキ博物館の学芸員であったガリーナ・ロク女史、そしてルプロワにおいて貴重な情報を提供してくださったゾーヤ・アグニョンさんとその家族には格別なお世話をいただいた。なお、10年以上にわたる筆者のサハリンの民族誌的調査について、入域許可の取得が困難な旧ソ連時代から援助をしてくださったサハリン州郷土博物館のスタッフに謝意を表したい。

文献資料では、サハリン州政府少数民族課、市立函館図書館にお世話になった。

本館第4研究部長友枝啓泰教授と第1研究部秋道智彌助教授には、草稿段階で目を通され、貴重なコメントを与えてくださったことにお礼をもうしあげたい。

本調査の実施ならびに収集データの整理にあたっては、平成5年度文部省科学研究助成金(一般C)、平成6年度昭和報公会研究助成金、平成4年度味の素研究助成金の一部を用いた。

文 献

天野哲也

1975 「オホーツク文化における動物儀礼の問題」『北大史學』15: 62-87。

知里真志保・山本祐弘

1979 「コタンの生活」山本祐弘編『樺太自然民族の生活』相模書房, pp. 14-94。

秦 櫛麿(村上島之丞)

1982 (1800) 『秦 櫛麿自筆蝦夷島奇観』雄峰社。

服部 健

1956 『ギリヤーク』楡書房。

池上二良(編)

1979 『ウイльта古画集録』北海道教育委員会。

犬飼哲夫

1941 「樺太オロッコの海豹猟」『北方文化研究報告』4: 15-33。

1969 「アイヌのあざらし狩り」アイヌ文化保存対策協議会編『アイヌ民族誌』第一法規出版, pp. 361-362。

クレイノヴィチ, E. A.

1993 (1973) 『サハリン・アムール民族誌——ニヴフ族の生活と世界観——』柘本 哲訳 法政大学出版局。

Крейнович, E. A.

1934 Морской промысел гилияков деревни Куль. *Советская Этнография* 5: 78-96.

間宮林蔵

1988 (1811) 「東韃地方紀行」間宮林蔵述 村上貞助編, 洞 富雄・谷澤尚一編注『東韃地方紀行他』平凡社, pp. 117-165。

松田伝十郎

1988 (1808) 「からふと嶋奥地見分仕候趣奉申上候書付」間宮林蔵述 村上貞助編, 洞 富雄・谷澤尚一編注『東韃地方紀行他』平凡社, pp. 193-216。

村崎恭子(編)

1993 『サハリンの少数民族 サハリンにおける少数民族の言語に関する調査研究——サハリニアイス語, ウイルタ語, ニブフ語——』(文部省科学研究費補助金研究成果報告) 横浜国立大学教育学部。

成石 修

1978 (1857) 『東徼私筆』大野良子校注 政界往来社。

西本豊弘

1992 「第2節 A区出土骨塚の動物遺体」前田 潮・山浦 清編『北海道礼文町浜中2遺跡の発掘調査』北海道礼文町, pp. 117-123。

西脇昌治

1965 「アザラン科」『鯨類・鰭脚類』東京大学出版会, pp. 338-398。

大塚和義

1966 「挾入離頭銘」『物質文化』7: 33-46。

1977 「アイヌのキテ(回転式離銘)の諸系列——形態と編年——」『国立民族学博物館研究報告』3 (2): 778-822。

1987 「北方諸民族」『民間信仰調査整理ハンドブック』上(理論編) 雄山閣出版, pp. 289-297。

1991 「サハリン民族学点描」『京都新聞』文化欄13回連載4月9日-7月9日。

1992a 「アイヌ文化のダイナミズム」『古代を語る』朝日選書 朝日新聞社, pp. 311-325。

1992b 「北方との交流」『世界』573: 169-176 岩波書店。

1993 「オホーツク文化と王権的社会の形成」『別冊 歴史読本』18 (20): 54-60 新人物往来社。

1994 「サハリンの先住民族における伝統的魚食文化」『助成研究の報告4』(平成4年度) 味の素食の文化センター, pp. 84-90。

更科源蔵

1955 「斜里アイヌ, 明治初年のアイヌ生活」『斜里町史』斜里町役場, pp. 169-229。

高橋盛孝

1942 『樺太ギリヤク語』朝日新聞社。

TAKSAMI, C. M.

1968 Features of the Ancient Religious Rite and Taboos of the Nivkhi (Gilyaks). In V.

大塚 ニウフのアザラン熊と送り儀礼

Dioszegi (ed.), *Popular Beliefs and Folklore Tradition in Siberia*, Indiana University, pp. 407-421.

ТАКСАМИ, Ч. М.

1975 *Основные Проблемы Этнографии и Истории Нивхов*, Наука.

涌坂周一

1984 「木製品」『松法川北岸遺跡』羅臼町文化財報告 8 羅臼町教育委員会, pp. 48-52。